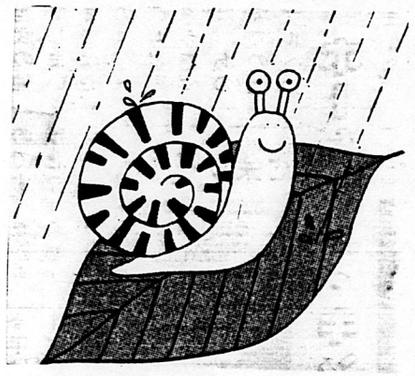
アストロラマ　Ｎｏ．７１

発行者　桑原由紀子　生駒市上町９－１２　☎０７４３７－８－１９６９
１９９１．６．１５



地球の怒りを思わせるような恐ろしい雲仙岳の火砕流のニュース、多くの犠牲者、本当に自然の力には、なす術もないナと思います。

２１年前、万博が終わって、九州旅行に連れてって下さった時、雲仙でも一泊して、地獄めぐりをしたことが思いだされます。

さて、いよいよ梅雨の時期、規則正しくやってくる季節、これも自然の営みの一つなんだなと、改めて感じるこの頃です。

自然大好きの美保さん、５月の歩こう会は、雨で流れたけれども、「話そう会」で大喜びだった美保さんの感激ぶりをもう一度・・・・

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ほんとに何という素晴らしい一日だったことでしょう！！　すてきなご主人さまにもお目にかかれて！　三重からお見え下さった方も、とてもすてき！　女性群も！

こんなにすばらしい人たちが、今　新しい日本を作ろうとしておられることで、何だか安心できそう、と思いました。

なかでも　平さん！スゴイわね！

お琴も聞けたし！　私が以前クラシック音楽を何とかポピュラーにしたいという熱意と同じものを感じ、大感激！

パネルシアターで「地球にやさしく」ぜひよろしくね！世の中を何とかよくしたい、という熱意の河田さん、それを聞いたらどんなに喜ばれることでしょうか！

杉原美保子

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

美保さん、どうも有り難うございました。あれから、ここ　「あすか野」あたりは、美保さん、重ちゃん（西宮さん）の話しで持ちきりでしたョ。

平真知子さんも念願の、劇団四季のシアターアドバイザーとなり、我々「彩」のプロデューサーとしても大活躍、パネルシアターもやりたいし・・・と益々美しく輝いているマッチこと真知子さんです。もちろんそれらのことを通じて、「同じ地球人、境い目のない仲良し」をめざしていることは、いうまでもありません。

さて、こちらも自然を愛して、株式会社　「自然」を作っちゃった秋山智弘さん、
今は、’９３信州博の総合プロデューサーとして、身体が三つあっても足りないほど、
忙しい毎日だそうですが、サイドストーリーがとどいてますので、紹介します。

アストロラマサイドストーリー　番外編　２

秋山智弘

「花と涙」

去年の今ごろは、大阪で開かれていた、花と緑の博覧会が話題になっていました。

私は、芙蓉グループの出展を担当したのですが、いろいろ考えて、出しものはミュージカルにしました。

「花咲く星の物語」というファンタジックなお話です。

これまでの博覧会で、大きな映像とか、ロボットのショウなどやってきたので、一度、生身の人が歌って踊るようなミュージカルをやってみたいと思っていました。

形どおりオーディションで出演者を選び、リハーサルを積み重ねて、４月１日に幕を開けました。同じ役を３人ができるように、つまり、３チームのキャストを組んで交替しながら、公演をしました。１日１０回。花博の会期中に１，８２４回のミュージカルを上演しました。

計画の時から、覚悟はしていたんですが、ライブの出しものというのは裏方も表方も大変なんです。

「上手にやろうと思わないでいいから、ステージに出たら気合をいれてやろう」というのが、プロデューサーとしての私の注文でした。

お客様からは、いろいろな反応がありました。ゼンソクの発作で苦しんでいる小学生の女の子が、このミュージカルを見ると、しばらく発作が出なくなる、という信じられないような話がありました。この子の家が会場に近く、パスポート券をもって２００回以上も見に来てくれました。

お医者さんの話によると、ゼンソクは心理的なきっかけで、良くなることがあるんだそうです。スタッフも驚きながら、この子の話は何よりの励みになりました。

会期が終わりに近づくと、それまで陽気だった出演者や、舞台監督、照明係りなどがお互いに無口になってきました。コンパニオンも同じです。きびしい採用テスト、トレーニング、開幕前の混乱する会場での寒い寒い実地訓練。夢中で過ごしてきた博覧会が、本当に終わってしまうんです。自分の青春まで終わりになるような、そんな思いが彼女たちの胸にあふれているのです。

こんな時、たとえ、スタッフルームの廊下ですれちがっても、「もう少しだね、がんばってね」などと、声をかけてはいけません。そっとしておいてあげるほか、ないんです。

２０年前、大阪万博のときもそうでした。今の若いものは、ドライだなんていいますが、博覧会の終幕を前にして、お嬢さんたちの気持は昔も今も変わらないとおもいます。

最終回のミュージカル公演は、皆の目に涙がありました。拍手が拍手を呼んで、ステージと客席の心が一つになりました。だれもが去りがたい思いでした。

それは苦楽を共にした博覧会の仲間たちが、それぞれ新しい人生を歩きはじめるための「前夜祭」でもありました。

「アストロラマ」という素敵なサークル誌を発行しているグループが大阪にあります。１９７０年の大阪万国博は、日本に新しい文化をもたらしたと評価されていますが、そこで活躍していたコンパニオンの人々が中心です。博覧会が生みだした、文化の芽が、大きく育っていくようにと、私もちょっぴり応援しているところです。

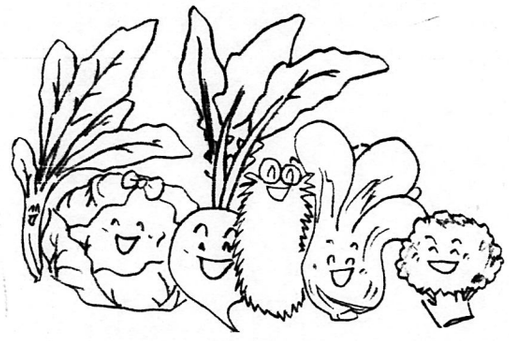
～～～

中等部は、びわ畑とか行く時、山を登って大変だけど、いろいろ学べる畑が楽しいです。
「タダのまつり」では、エリアスタッフで「目立たず、じみちにゴミをひろって」っていうのでやっていました。僕の取り組んでいる所は、「もっと力をつける」と「実力をつける」と「野球でホームランを打てるようになる」です。

浦川太一

続いてお父さんから太一君への返事

お元気ですか？てがみ有り難う。元気で毎日、六川の村で取り組んでいる様子で安心しました。お父さんも、この前の「タダのまつり」では５月２日の昼から春日山に行き、奈良支部のお店で出す「一体ばし」の準備に一役させてもらい、３日のまつり終了後、テントの解体までさせてもらって、お父さんなりに取り組んでいます。
まつりに六川の中等部生全員参加した様子、どうでしたか？



お父さんは一役やらせてもらい、大変楽しい２日間を味わいました。参加した人みんなが、何でもタダの気持で、金の要らない、美しい心の要る自分に気付けたら、本当に仲良く楽しくなるのになぁと感じました。
農を通じて学び、農の楽しさを味わい、また学校では、友達を増やして、「自分からヤル」という気持で取り組めたらいいですね。
いろいろ分からないことは村の人に聞いて、村は一家族です。村のお父さん、お母さんは、子供達の事をよく見ています。よく聞いて、中等部生としての自覚、取り組み所を研さんしてもらい、そして取り組めたらいいですね。　ではさようなら

ホームランを打ったら教えて下さい。
家庭研さんでは腕ずもうを楽しみにしています。

５月１５日　父より

「タダのまつり」とは？？？

三重県のヤマギシの村で行われたまつりで、物も人の心も何もかもタダという、夢のような一日を実現したまつりです。奈良在住の落語家、露の新次さんもおなじバスで行ったのですが、彼の感想は・・・

５月３日、ヤマギシ会・タダのまつりに行ってきました。ヤマギシ会は、ヤマギシズムという思想に拠った共同体で、無農薬の野菜や牛乳、肉、卵などを生産しています。

「タダのまつり」というのは、その日一日は全てがタダ（無料）ということです。おにぎりも卵焼きも、ブタの丸焼きもアイスクリームも、うどんもワタアメも金魚すくいも、それこそ大縁日、大バザールが、全て無料なのです。
私的所有による物欲と競争原理のとりことなっている我々のこと、奪いあいの修羅場になるかと想像してゆきましたが、人間たっぷりあると思うと意外にバタつきませんね。
手渡してくれる人（幼、小、中の子供が主）が、実にゆったりしたものごしで、にっこり、どうぞとくるもんですから、こちらもガツガツする我が身が恥かしくて、猿沢の池の鯉のようなことにはならない。
人間の持っているいい面が自然と浮かびあがる、のびやかな空間でした。ふつうは行楽、イベントとなるとビールでものまないと所在がないのですが、不思議と忘れていました。
お金が介在しないというのはなかなか、ステキなことです。今の世の中では、夢の一つですが、例え一日でも夢が実在したのはすばらしいことです。こんなんやったら戦争もおこれへんやろなァと思いました。
もっとも不心得もんもおりまして、もらわな損みたいに、果物をリュックにいっぱい貰って帰ろうとするテンション上がりきったおばちゃんと、極めつけはブドウパンのブドウが一つとれてるので、換えてくれとゆうてたおっさんでした。

昔から芸事は６才の６月６日から始めるのがよいとか・・・沙代子もこの日、お琴の吉岡紘子先生とともにすてきな記念の日を持つことができました。
この先はどうなることやら・・・　　では次号をお楽しみに！

アストロラマ　Ｎｏ．７２

発行者　桑原由紀子　生駒市上町９－１２　☎０７４３７－８－１９６９
１９９１．７．１５

５月の「話そう会」の感激がまだ続いています。美保さん言わく『三重から来たステキな方』
大窪興亜さん（本人は誰のことかな？ナンテ照れていましたが）からのお便りでスタートです。
≒≒≒≒≒≒≒≒≒≒≒≒≒≒≒≒≒≒≒≒≒≒≒≒

しのつく雨のあの日の帰路、車のハンドルを握っていたら、記憶ノートのページがめくれて、サムエル・ウルマンの詩が頭のてっぺんに舞い上がってきました。

青春とは人生のある期間ではなく、心の持ちかたを言う
ときには２０歳の青年よりも、６０歳の人に青春がある
年を重ねただけで人は老いない
理想を失うとき、初めて老いる

西宮さん、杉原さん。お二人はまるで天空に舞う蝶のよう。「世界中にキライな人は一人もいない」、「少しでも世の中をよくしたい」。しなやかで自在。新緑の葉脈みたいな透けた感性。こんな人生の先達の一言ずつに、ボクはただ、アングリと口をあけているしかありませんでした。

それにしても、いろんな人の集まりってウキウキ。ホテルでの食べ残しは持ち帰るって話、参った。一本取られました。日頃、考えていたことではあるけれど・・・

琴もよかった。やっぱりあれは「音」に「色」をつけて呼ばずにはいられません。一度、ヒマラヤの麓で聴いてみたいなぁ。

貼り絵の寸劇（パネルシアターのこと）。あのサクランボみたいなセンス、どこからくるのですか？ボクにはとてもとても。

楽しい集いを有り難う。

６月２５日　大窪興亜

大窪さんは、ヤマギシを通じて知りあい、三重県津市に引っ越される前は、すぐ近所で家族ぐるみで仲良ししています。長年勤めた新聞社をやめられ、今、アジアに目を向けて、ネパール、フィリピン、タイなどたづねて、大きな夢をふくらませている青年（？）みたいなおじさんです。

つづいて、いつも青春している秋山さんのサイドストーリーです。

アストロラマサイドストーリー　番外編　３

秋山智弘

「津軽コトバ」

昭和６３年、本州と北海道を結ぶ青函トンネルが開通し、それを記念する博覧会が開かれました。

私は、青森側の博覧会つくりに、総合プロデューサーとして参加しました。

困ったのは、コトバでした。

津軽のコトバは、とても難しいんです。会議などでは、皆さん、いわゆる共通語でしゃべってくれるんですが、論議が熱くなると、早口の津軽弁になる。

そのやりとりが、私にはわからない。コトバは文化です。

それぞれの風土で育まれた文化の証（あかし）がコトバだと思います。それがわからないのは、悲しいことです。

教わったんですが、津軽のコトバに「まいね」というのがあります。ふつうはＮｏ、ダメという意味なんですが、「まいね」「まいネ」「マイネェ」と３種類くらいの発音がある。発音が微妙に違って、意味も３つあるというんです。

最初の「まいね」は、全くのダメ。

「まいネ」は、今はダメだけど、まあ考えときましょうという意味。

「マイネェ」は、ダメだけどいいよという意味。

あるとき、コンパニオン募集の打合せがありました。私は、津軽のコトバを、この青函博の公用語にしませんかと提案しました。もちろん、コンパニオンは共通語をしゃべるんですが、その中へ積極的に、出身地の津軽や南部のコトバを入れてもらう。バイリンガルみたいなものです。きっとお客様に喜ばれますよ、といったんです。

博覧会の事務局の皆さん、しばらく考えておられましたが、運営部長さんが、

「秋山さん、それは　まいね　です」っていうんです。

「せっかく、県の歴史はじまって以来の博覧会をやるんですから、来て下さる人々には、とびきりの都会的な経験をさせてあげたいんです。博覧会まで、土地のコトバを聞きたくないって言われますよ。第一、若い娘っこたちにそんな条件をだしたら、コンパニオンになり手がなくなります。」というわけです。

私は、「今の『まいね』はどの『まいね』ですか？」ってたずねました。

「まあ、２番目の『まいね』でしょうね」ということでした。

結局、青森の博覧会は、予想をはるかに上まわる入場者があり、成功のうちに幕を閉じましたが、津軽コトバのアナウンスを聞くことはできませんでした。「まいね」でした。

これに懲りず、再来年の信州博にむかって私は、同じ提案をしてゆこうと思っています。

長野県には、すばらしいニュアンスを持った土地のコトバがいっぱいあります。

たとえば、ズク　というコトバです。「労を惜しまない」という意味です。関係者の皆さんと、ズクを出して論議をしてゆきたいと思っています。

～～～

続いて、小林節美さんと同じ、西宮市甲子園にお住まいの、中島悠紀さんからも、お便り届いています。同じ町内・・お知りあいかな？　なんて思いながら・・・

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あじさいやストケシアが新緑の中でさわやかに咲いています。六月には、青い花が似合いますね。

いつもアストロラマを送っていただき、有り難うございます。正直に言って、最初は少しとまどってしまいました。というのも、春の一日、杉原さんとあまりにもいろんなお喋りをしたものですから、アストロラマが何だったか、とっさにわからなかったのです。

私が以前、万博協会に勤務していたこと、その時　神谷さんとご一緒したことを、杉原さんが覚えていて下さって、桑原さんにお願いしてくださったのですね。回を追うごとに、桑原さんのご家庭の様子や、アストロラマの仲間の方々のお人柄がわかって楽しく読ませていただいてます。

それにしても、人と人のつながりを大切にし、あらゆる人々と一緒に、生きいきと楽しく生きていこうとする桑原さんの、おおらかで積極的な姿勢にいつも感心しています。

電話のお声と合わせて、私なりのイメージはもう出来上がっているのですが、果たして実物と似ているでしょうか？？？

これからも楽しい通信を続けて下さいますように・・・

6月19日　中島悠紀

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

悠紀さん、どうも有り難うございました。全く突然に、何の説明もなく舌を噛みそうなアストロラマが舞いこんで、さぞ驚かれたことと思います。ごめんなさいね。でもこうして読んで下さって嬉しいです。書くというよりお喋りしているノリです。今後とも一緒に楽しみましょう。

さて、最後は「美保子の地球にやさしく」です。美保さんは6月に、チェコに行かれ、プラハでは、ポーベル君が赤いバラの花束をもって迎えてくれたそうで、とても喜んでいらっしゃいました。青木千里さんも、同じ頃ボストンに行かれ、バルサムに会ってきたそうで、ああ、私の次の旅行はいつのことやら？？？

今はそんな未来を夢みて、せっせといろんな国の方と友達になり、友情を深めているところです。

では、次号をお楽しみに。

環境シリーズ

美保子の④ 地球にやさしく

杉原美保子

形ある物を大切に

六年間ボストンに住んで思ったことは、アメリカという国は、使い捨ての紙コップや紙皿をたくさん利用するかと思うと、一方では、まだ使える物は当然、再利用するべきだという意識を持つ、おもしろい国だということです。

そのひとつがガレージセールとかヤードセールと言われるもので、不要になった品物を自分の家のガレージや庭の芝生に並べて安く売ります。

友人のメアリは、毎年秋になると、生徒達からすぐに電話がかかってきとクリスマスに備えて大掃除をし、そのときに出た不要品を寒くなる前にガレージセールで売り出していました。セールには、道行く人がたくさん立ち止まります。車を止めて寄って行く人もかなりあり、ジョークが飛びかい、それは春や秋の風物詩でした。

スーツケース一つずつ持って渡米した夫と私。初めこそ家具什器付きの家を借りましたが、三年目からは、家だけを借りて中身は全部セールで楽しく買い集めていきました。

六年経って帰国するときは、私達も一ヵ月前にムービングセール（引っ越しセール）をしたのです。場所は家の中。電話機十ドル、本棚十五ドル、いす三ドルなどと絵入りのチラシを十数枚作って、電話番号も書き添え、私はハーバード大学やMIT（マサチューセッツ工科大）、またスーパーマーケットの掲示板に貼りに行きました。誰でもそんな掲示板を使うことができるのです。

地方からやって来たばかりの学生達からすぐに電話がかかってきて、住所を聞き、品物を見に来る人が続きました。引き渡し日が明記してあるので、お金だけ払って帰っていきます。

残った物は、値下げして翌週出すと、それを待っている人もあるのか、ほとんど売ることができました。

学生はもとより、外国から来て住む人は、数年の滞在のために新しい物を買うという意識が全くないのです。ガタガタの整理ダンスでも、冷凍能力の落ちた冷蔵庫でも、それで十分だと喜んで買っていきます。不要品を寄附するつもりなら、それを受け入れる所も各地にありました。

独り住まいの老人が、一部屋しかない老人ホームに移るときに、不要な物をすべて引き受け、それで得たお金は市立病院の機械購入費に充てていた町。世界に二万一千の拠点を持つサルベーション・アーミイでは寄附した家具などに、最高で新品の二〇％引きの値段の免税証明書を出します。アメリカでは寄附金は免税になるのです。

六年振りに日本に帰り、団地に住んでみてびっくりしました。冷蔵庫でも洗濯機でも、まだ使える物がたくさん捨てられています。こんな国は世界中にないと思い、恥ずかしくなりました。また、こんな使い捨ての状態の中で育つ子供達のことを思うと、恐ろしい気がしました。

物を大切にできないことは、人間をも大事にできないことにつながるのではないか、と思ったからです。皆で良い方法を考えてみようではありませんか。

（フリーランス・ライター）

次回は「水を大切にしましょう」

アストロラマ　Ｎｏ．７３

発行者　桑原由紀子　生駒市上町９－１２　☎０７４３７－８－１９６９

１９９１．９．５

皆様こんにちわ。長いと思っていた夏休みも、終わってみれば、早いものでもう二学期ですね。今世紀最大と言われるソ連の出来事も飛びこんできましたね。

皆様にとっては、どんな夏休みだったでしょうか？

まづは、夏のこども楽園村の報告から・・

梅雨明けが宣言され、夏休みが始まった７月２１日から２８日までの一週間、ヤマギシズム夏の楽園村に親子で参加してきました。今回、沙代子は三重県春日山実顕地へ、私は生活スタッフとして、同じ三重県の豊里実顕地へ。

夫に送りだされて、思いっきり楽しんできました。

生活スタッフというのは、楽園村にきた子供達のごはんを作るお母さん役をやる“スイジーズ”と子供達の衣類をきれいにする“ランドリーズ”があり、私は今回、ランドリーズで一役やらせてもらいました。

毎日々々、泥まみれ汗まみれのパンツやシャツを洗って（洗うのは機械）干したり、乾いたものをたたんで分類し、それぞれの手元に返していきます。ランドリーズのお母さんは、各地から集まった６名。楽園村に参加した子供達は、幼年さんから中学生まで９００名近く、各スタッフも合わせると、なんと１０００人分もの衣類のお世話をすることになります。もちろん、子供達も生活参加といって、一緒に干したりたたんだり、それぞれ一役をやります。

今回はスイス、韓国、ドイツ、ブラジルでも同時に楽園村が開催され、私の小さなひと役もそんな楽園村をつくっている歯車のひとつなんだなぁと思えて、とても楽しい一週間でした。全国から集まった子供たちも、一日一日、仲良しが深まり、やる気を出してきて、食べることも遊ぶことも、歌うことも生活参加もおもいっきりやって楽しんでいる様子でした。この子達がやがて２１世紀の社会を作っていくのだなと思うと、とても楽しみ。そんな子供たちの育つ場“楽園村”づくりにひと役かかわっているんだなと思うと本当に嬉しくなりました。

テーマもでっかく「夏、世界の親として万人の子等を迎えて」本当に９００人の子の親イヤ、世界各国の楽園村に来た子の親になる練習をさせてもらったようでした。

皆様もこんな素晴らしい子供の育つ場“楽園村”に子供を送ってみませんか？そして貴方自身も楽園村の楽しさ味わってみませんか？

ユッコの楽園村報告でした。

平成３年(1991)７月１９日（金曜日）　奈良日日新聞

あすか野郵便局　10周年記念イベント

邦楽演奏にうっとり

金魚すくいもにぎわう

生駒市あすか野郵便局（同市あすか野南二―一、杉田芳嗣局長）で十六日、開局十周年記念イベントが行われ、約百人余りの住民がイベント会場のあすか野公民館に集まった。杉田局長のあいさつに続いて、邦楽グループ「彩（あや）」（尺八・桑原仙山、琴・桑原由起子、谷垣千鶴、小山利恵子）による演奏会。「夏の歌」「瀬音」「海の青さに」「まりと殿さま」などの邦楽の調べに聴き入っていた。午後は郵便局の前で金魚すくいがあり、親子連れでにぎわった。

杉田局長は「開局十周年の区切りとして、感謝の気持ちを込めてイベントをさせてもらった。邦楽演奏会ということで住民の方がどのくらい来てもらえるか心配したが、大勢参加してもらって喜んでいます。今後とも郵便局をよろしく」と話していた。

邦楽で和やかな交流。あすか野郵便局開局十周年イベント

邦楽アンサンブル彩（あや）の活動

地元あすか野郵便局開局１０周年記念イベントでコンサートをやらせていただきました。また、青木千里さんを通じて知りあった、アメリカ、フランス、ドイツ、イギリス、オーストラリア各国のお友達を招いて、ミニコンサート、ホームパーティー、盆おどりなど、このところ国際交流づいている「彩」です。

この秋には、いよいよ奈良県芸術祭に参加させていただき、生駒市コミュニティーセンターで下記の通りコンサートを開きます。貧乏主婦の集まりなので、チラシもプログラムも手作り、何もないところから一つの舞台を作りあげるプロセスも楽しんでいます。

記

奈良県芸術祭参加
邦楽アンサンブル彩コンサートＮｏ．２０
光（こうさい）彩　～秋に染まって～

後援　ＮＨＫ奈良放送局
毎日新聞奈良支局

日、時・・・１９９１年１０月１２日（土）
午後６じ３０分開演
場所・・・生駒市コミュニティーセンター１Ｆ文化ホール
（生駒市セイセイビル内　☎０７４３７－３－０５００）

プログラム

１．みだれ　　２．甲乙（かんおつ）
３．瀬音　　４．海の青さに
５．シバの女王、コンドルは飛んでいく、涙のトッカータ
６．秋によせる三つの幻想曲　　以上　　司会　平　真知子

入場は無料です。秋の一日、奈良見物のあと「彩のコンサート」に・・なんていうのはいかがでしょうか？会場は近鉄生駒駅　南出口すぐです。

そんな「彩」を奈良新聞が取材にきてくれました。

平成３年（1991）８月24日　土曜日　奈良新聞

なかま

邦楽アンサンブル「彩」

ふだん着姿で発表も幅広く

「邦楽は着物を着て演奏されることが多く、堅苦しいイメージを持っている方が多いのではないかと思います。私たちは演奏する側も聴く側もふだん着で参加できる邦楽を目指しています。最近のミニコンサートではお客さんと一緒になって歌も歌いました」と桑原由紀子さんは話す。

琴や尺八のフリー奏者が集まり、花博や「竜田川もみじ祭り」に出演するなど、邦楽を通じて幅広い活動を展開しているのが「彩（あや）」だ。

厳しい家元制度の中、邦楽に取り組む人の数は最近減る傾向にあるという。

「彩」を構成するのは琴を担当する三人の女性と尺八担当の男性二人。「邦楽の楽しみをもっとたくさんの人に知ってもらおう」と、昨年の一月に結成された。六歳から琴を弾いていたという小山利恵子さんが「一緒に邦楽をやりませんか」と、情報紙を通じてメンバーを募ったのがきっかけとなった。練習は火、木、日曜日の週三回、午前十時から午後五時まで、メンバーたちの自宅を順番に使って行っている。

五人のメンバーたちは現在フリーだが、いずれも師匠についた経験を持ち、うち四人は「看板」の保持者。「師匠についているといろいろな制約があり、思うような活動ができない」という。「こんな邦楽ができたら楽しいな」と思っていたことを、五人が一緒になって一つひとつ実現している。

「とにかく動けば何とかなる」がメンバーたちのモットー。演奏場所の交渉からステージ衣装の準備まですべて自分たちで行う。「お客さんが一生懸命聴いてくれる所ならばどこでも喜んで行く」という。衣装は手作りのものを使うこともある。ドレスで演奏することも多く、ミニコンサートでは舞台の背景にこってみたりと、演奏はもちろん、本番までが結構楽しいという。

ふだんの練習では演奏を聴いてくれる第三者がいないため、演奏をテープに採り、みんなで吟味を重ねて仕上げていく。知らず知らずのうちに「彩」のテンポになり、曲が「彩」の表情になってくる。

今年三月にはアートフラワーの会場で演奏した。「お願いしますと頭を下げるのではなく、お互いの「こんなことをしてみたい」という気持ちが通じ合った時、いいものができるのだと思います」と桑原さん。「その時その時を精いっぱい楽しみたい」という気持ちがグループの原動力となっている。

【ひとこと】谷垣千鶴さんは「このグループでは失敗した時、「しまった、やめておこう」ということはありません。必ず、次はどうしようと考えています」と話している。

【メンバー】桑原仙山▽小山政夫▽桑原由紀子▽小山利恵子▽谷垣千鶴

（連絡先＝生駒市上町九ノ一二、電０７４３７－８１１９６９、桑原由紀子さん）

（和）

美保さんと歩こう会企画お願い

10月6日（日）A．M10：30～P．M4：00ぐらいまでで、京都あたりで「歩こう会」を企画していただけないでしょうか？？？

美保さんからこんな嬉しいお便りをいただきました。この日90才のおばあちゃんを囲んで、四世代集まり、京都で一泊されるそうで、集まりは夕方だから、その前に「歩こう会」をという提案です。

私の方、12日にコンサートを控えてちょっと動きがとれないのですが、神谷さん、宮脇さん、大窪さん他美保さん大好きな方、何とぞよろしくお願いできないでしょうか？

美保さんは相変わらずお忙しくて、6月にチェコかと思ったら、8月はアメリカ、9月は北海道と文字通り世界を飛び回っていらっしゃいます。「歩こう会」では、そんな中からいろんなお話を聞かせて下さることでしょう。

世界の動きをしっかり見る目、誰をも警戒させない笑顔、すばらしい体験をひとりじめしない広い心、豊かな書く才能、どれをとってもすばらしいですね。

こんな素敵な先輩に「アストロラマの編集もこの頃ますますさえてすばらしい！！」なんてほめられて、一人でニカニカ喜んでいます。

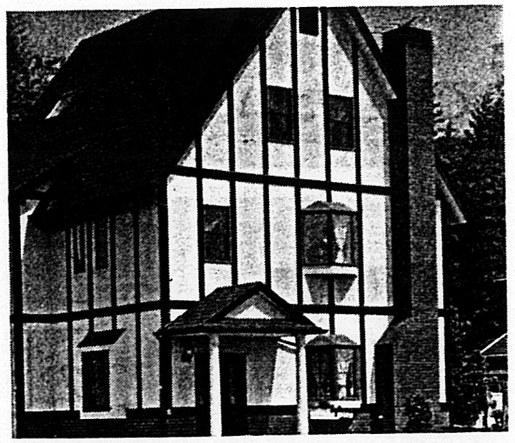
会計報告

	摘要	収入	支出	残高
91．7．15	繰り越し			50，276
6．28	カンパ	1，000		51，276
7．15	コピー代（72号）		3，450	47，826
〃	切手代		5，006	42，820
8．10	切手のカンパ	1，240円分		

いつも暖かいカンパを有り難うございます。

ところで、「美保子の地球にやさしく」がでている「**世論時報**」を貴方も読んでみませんか？美保さんに聞いて購読者となり、毎号身近な話題、特集について私自身も真剣に考え、時々自分の考えを文章にして投稿したり・・・それが出す度に本の中で活字となって出るので、嬉しくなったり喜んだり・・・こんな小さなかかわりを持つことによって、皆様にもこの本を読んで欲しいなって気持になってきました。社会の問題でも、みんなで考え少しでも良い方向に持って行けたらいいなとおもい、そう思えたら、私の場合こんな行動になって表れました。何でもやってみる。これ私のモットーです。

では、さいごにその「美保子の地球にやさしく」です。



環境シリーズ

美保子の

⑧

地球にやさしく

杉原美保子

断熱を考えた家を

もう三十年前のことです。宣教師のキングさん家族が、アメリカから神戸にやってきました。彼らは山の中腹にある古い平屋の日本家屋を借りることにしたのです。

夏の間は涼しいので問題はありませんでしたが、冬になると、「いくらストーブをたいても、熱が天井から抜けてしまい部屋が暖まらない。寒くて仕様がない」と言うのです。

パイオニア精神あふれた行動的な彼らのこと。キングさんは早速、断熱材のドンゴロスを買ってきて、天井に敷きつめました。その結果、暖房効果があがって、快適に暮らせるようになっと自慢していたものです。

彼の影響をうけた私達は、家を建てる時、断熱を一番に考えました。床板を二重に張って空気の層をつくり、コンクリートの壁と内装の間には、アルミ箔と九ミリのラスボードを張りました。天井にも断熱効果のある材料を使ったのです。

お蔭で夏は涼しいし、冬の暖房効果はてきめん。後でセントラル・ヒーティングにするつもりで、配管だけはしておいたのですが、二十年以上たった今もそのままで過ごしています。広い居間も小さなストーブだけで、すぐに暖まるからです。

この夏、二十年来の友人とスイスのバーゼルで出会いました。彼は、「あなた方の泊まっているホテルの窓ガラスをよく見てごらんなさい。きっと、二重ガラスになっていますよ」と言いました。

窓ガラスの枠は一つなので、よく見ないと分からないのですが、ほんの一センチほど間隔をあけて二枚のガラスが入っていました。このせまい空気の層が断熱効果を高めてくれます。

スイスでは、ここ数年政府の勧めがあって、エネルギー節約のために窓ガラスを二重にしている所が増えているそうです。

彼は話を続けました。

「私が神戸に住んでいたときは、最初に借りたアパートも、後で引っ越した一戸建ての家も断熱の工夫がしてないために、冬の熱効率も悪かったし、夏はとても暑くて大変でしたよ」と。

昔のわらぶきの家は、あの分厚いわら屋根がすばらしい断熱材になっていました。壁もそうです。新しい建築材料になった現在、外観や機能性に気を取られて、一番肝心な居住性への配慮がたりないのではないでしょうか。

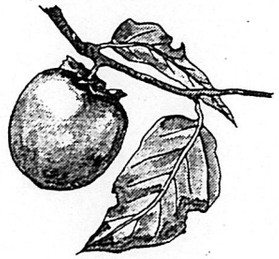
特にこの頃は、夏に冷房をする家が増えてきました。家を建てる時に、少しお金がかかっても、断熱の計画をすることによって、エネルギーの大きな節約になります。そして長い目で見ると、そのほうがずっと経済的だと思います。

（フリーランス・ライター）

アストロラマ　Ｎｏ．７４

発行者　桑原由紀子　生駒市上町９－１２　☎０７４３７－８－１９６９

１９９１．１０．２５



ハーイ！皆様こんにちわ。お変わりないですか？
私の方は元気いっぱい。コンサートも無事に終わって、
もう次をめざして頑張っています。
まづは、その報告から・・・

「邦楽アンサンブル彩」がめざすのは、人と人の和、輪を広げ、邦楽界に新風を、ということなのですが、コンサートを振りかえってみて、本当にやれるところを出し合って作り上げた舞台だったと思います。

昨年あたりから漠然と、舞台、照明のある会場でコンサートをやりたいねと言いはじめ、コツコツとメンバー（主に琴３人）が実行に向けて行動開始。練習はもちろん、合間に衣装を作り、プログラムを作り、新聞社に足を運び、案内ハガキを書き・・・・

行く先々で熱っぽく語る私達に賛同して、じゃ私も何かひと役をと言って手伝って下さった裏方さん・・アストロラマ読者の平真知子さんには、プロ並の司会を、坂上栄子さんには、文字通り舞台に花をそえていただき、より一層華やかな舞台に。

青木千里さんには、にこやかに受付係りを、また内外のお客様をいっぱい連れて来てくださり、大感激でした。他にも調絃、着付けなど舞台は裏方さんによって決まるほど大切な方達なのですが、私達は本当にステキな方に囲まれて、何の心配もなく、演奏に没頭することができました。

神谷さん、大窪さん、奥田さん、その節は有り難うございました。ひと味違う“彩風コンサート、お楽しみいただけたでしょうか？

今後とも彩をよろしく！ということで報告を終わります。

いつも元気な重ちゃんこと西宮さん、この夏休みに、お孫さんと、イギリス（ロンドン）イタリア（ローマ・ボンベイ）、フランス（パリ）、スイス（ジュネーブ）を旅してこられたとか・・・。すばらしいですね。身近かにこんなすばらしい人生の先輩を持てたことを、改めて感謝したい気持です。その西宮さんのお便りから・・・

ワイフと二人旅とは違った両方共に相手を気遣う旅でそれ相当に楽しい思い出をたくさんつくることができました。

しかし、出発前に医者の診断書を出さされました。この調子では、医師同伴を要求されるようになるかも知れませんょ。・・・

だって・・・本当に楽しそうですね。次の時は一緒に行きたいくらいですよ。
いいえ付き添い人じゃなくて合棒として・・・。

「美保さんと歩こう会」

７３号で「美保さんと歩こう会」の企画をお願いしますって載せた結果、
神谷さんから「今度はボクがやりますょ」と嬉しいお電話。

神谷さんのこと、きっとすてきな歩こう会を企画してくださるだろうと、私の方は安心して練習に明けくれていました。

そして、７日（歩こう会の次の日）、美保さんから
「楽しい歩こう会を有り難う」ってお電話をいただき、参加した方の楽しい笑顔が見えるようでした。

神谷さん、どうも有り難うございました。

次に、最近このアストロラマを読んで下さるようになり、私のことをなぜか「師匠」と呼ぶお友達、佐藤勇吉さんのお便りを紹介します。

彼は、高校教師で、この夏、ヤマギシの「障害児楽園村」のスタッフをし、そのとき心に焼きついた場面を書いて下さいました。

（注）ヤマギシの村では、「こども楽園村」、「障害児楽園村」
「老蘇楽園村」「幼年楽園村」「中学生楽園村」
「若人楽園村」などがあります。

じりじりと照りつける真夏の太陽。トウモロコシ畑から引きあげてきた子供たちは、公園に集まってきた。ブランコで遊ぶもの、ジャングルジムに登っているもの。日陰で休むもの。

その時、スタッフのお母さんが車イスを押しながら、

「祥子がオスベリするといっているからやらせてみようか？」と声をかけてきた。

でもどうやってスベリ台に登ることができるのだろう。

「お尻で登るよ」お母さんは言う。

私は祥子を抱きあげて、ハシゴの３段目にのせた。祥子は手すりに力をかけ、踏みだいに背中をぐっと押し付けながら、尻を持ちあげて登っていく。背筋を使ってよじのぼるように・・・私は一段一段ついていく。祥子のシャツから汗がしみでてくる。

やっとてっぺんについて、狭い台の上で身体を回転させてやり、祥子は滑っていった。

こんどは恵美子がすべるという。私は車イスから恵美子を抱きあげて、はしごに座らせた。このときこども楽園村の子供たちが数名、スロープの方から勢いよく登ってきた。リーダー格の少年（小５）がはしごの下に腰をおろした恵美子を見て驚いた顔をしている。

「この子が登るからそこで番をしてくれる？」とお母さん。

少年はキチンとした態度で大きくうなづいた。

私は大きな味方ができたようで嬉しかった。

これで安心して登れる。しかし、恵美子は祥子より全体に筋力が弱く、自力で登ることは、とてもできない。私は、意外に重い彼女の身体を引きずり上げながら、一段一段登っていく。下では少年が幾分身をかがめ、息を止めたように、食いいるように恵美子と私の動きを見まもっている。

てっぺんで体の向きを変えようとしたとき、恵美子の足が鉄の柵にからまって動けなくなった。そのとき下にいたこども楽園村の一人が、

「永久に出られないかもよ」そうはやしたてた。

「そんなこと言うな！」私が叫ぶ前に、下で見まもっていた少年の声がした。

すべりおりた後、再び車イスを押しながら振り向くと、じっと見送っている少年の姿があった。我を忘れたように、身動きもしないで・・・

少年はこの夏、この場で大きい人生を生きたように思った。人間としての生き方を、その真の値打ちを全身でつかんだ・・私はそう確信した。

障害児楽園村の夏は終わった。しかし季節の巡りの中で、楽園村は続く。

子供は育つものだ。育つものとして生まれてきた。健常児も障害児も、仲良しで育つ、一体で育つ。そのふるさとがこの村にある。

私はこのふるさとのやさしい土に静かに鋤をいれていこう。

鬼工房の仲間達

桑原由紀子

９月１５日、またまたステキな人達との出あいを楽しんできました。場所は、生駒山中腹にある鬼工房。ここに住む陶芸家の金子夢土さん、夕子さんご夫妻が大好きな人達を集めて開くパーティーに、招かれた次第です。

とにかく行ってみてびっくりするやら感激するやら・・・同じ生駒でも別世界のような山の中で、お二人の手作りの器に、夕子さん作のお料理が並べられ、どの器にも、家の回りの木の枝、葉、花など自然の緑が形よく添えられ、その盛りつけひとつにも感激しました。

“人が好き”というお二人だけに、集まった方達がまた素晴らしい方ばかり。音楽家、画家、ヨガの先生、建築家、大学教授、鬼工房のお弟子さん、その他と多種多才。

金子さん自身が、人と仲良くし、一人一人の能力を出しあって、何かを産みだし、楽しみながらお金も入り、なお世のためになることをしたい・・・そんな夢を持つ人です。

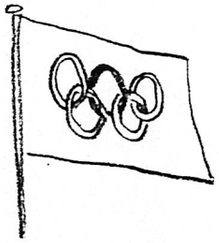
この日は、そんな創造集団“天地（あわ）”が作った作品（？）、一軒の家のスライドを見せていただきました。

集まった人達が自分の持ってる才能、アイデア、技術を出しあうことで、何倍も豊かになれる。まさに「放してこそ豊か」だなって思いました。

自然を愛し、人を愛する生き方、素晴らしい人達をアストロラマの皆様にも紹介したくて書きました。

一緒に行った青木千里さんも、とても喜んで下さり、そのことも私にとっては、嬉しいことでした。

～～～



ところが、来年だというのにスペインではもう一つ盛り上がっていない。オリンピック・ポスターもエキスポ・グッズも殆どお目にかかれない。気位は高いが悠々としているスペイン人らしい。

さて、気温は３５度を越える日もあったが、大体日本と同じ、但し乾燥しているから木陰に入ると大変涼しい。だが乾燥の為、歩くと喉が乾く。向こうの水は「硬水」だからそのまま飲むと下痢をする。皆、ミネラル水を持ち歩いた。

美しかったのは、グラナダのアルハンブラ宮殿。因みに「グラナダ」は“ざくろ”、「アルハンブラ」は“赤い絵”という意味です。偶像を禁じたイスラム教には、キリスト教における十字架像もマリア様の絵もありません。床も壁も天井も精緻を極めた幾何学模様が色々なバリエーションと色彩で、どこもでも続き、別世界に誘い込まれたような溜息を誘います。天井の造作の素晴らしさを誰かが“凍った花火”と表現しました。

山の上に築城されているのに、シエラネバダ山脈の水系を巧みに引いていて、宮殿の至る所で、池と噴水にふんだんに水が使われています。人類が造った最もロマンティックな建物という言葉もありますが、歴史を調べ、ワシントン・アービングのアルハンブラ物語を読んでみれば、美しさの中にも哀愁が漂っています。

アルハンブラ宮殿に続いて、夏の離宮のヘネラリーフェ、大聖堂、下町の横町からユダヤ人の住宅街、ジプシー地区までこの日一日で歩いた距離は万歩計で３万４千歩を数えました。

美しいのはアルハンブラばかりではありません。丘の上から眺めた喝色の古都トレドの全景、ドン・キホーテが痩馬に跨り、槍をかざして突っ込んだラ・マンチャの丘の風車、セビリアでは大聖堂のヒラルダの塔から眺めた町の景色と建築中の万国博覧会の予定地、コルドバでは、美しい庭園のある城塞と、神秘的な馬蹄形の列柱の並ぶ回教のメスキータ。

セゴビアでは、壮大な石造りのローマ時代の水道橋、アビラでは、白雪姫の映画のモデルになったお城と街を取り巻いて長く長く続く城壁。

マドリードは“ロエベ”のバッグや“リヤドロ”の人形など、楽しいお買物ももちろんだが、ここは何と言っても「プラド美術館」。

スペインの３大巨匠といえば、エル・グレコ、ベラスケス、そしてゴヤ。

グレコは彼独特の赤、黄、青の色を使い、縦長にデフォルメした図柄で、見る者を宗教的雰囲気に引きずり込む。しかし王には気に入られず、殆どトレドで過ごした。

首席宮廷画家ディエーゴ・ベラスケスの描く大作「ラス・メニーナス」（宮廷の女たち）、そしてゴヤの有名な「裸のマハ」と「着衣のマハ」。

マハとは“伊達女”という意味。モデルはアルバ公爵夫人と言われて来たが、どうやら時の宰相マヌエル・ゴドイの愛妾ペピータ・ツドウさんらしい。そして「１８０８年５月２日」と「５月３日」。ナポレオン軍の征服に反対した民衆の反乱と処刑の絵です。

別室には聴覚を失ってからひたすら描き続け、美術史上評価は高いが、どうしても好きになれない「黒い絵」シリーズ。クリスマスカードとして人気が高い、バルトロメ・エステバン・ムーリョの「無原罪のお宿り」、マリア様の表情が何ともいえず美しい。

３千点といわれる展示は、１時間半位ではとても十分に見ることはできない。

プラド美術館の別館には有名なピカソの「ゲルニカ」があります。ゲルニカは北スペインの小さな町で、内乱の時、ナチスの空軍が無差別爆撃をしたのに抗議して、パリ万国博のスペイン館の目玉としてピカソが描いた。その後、ナチスの将校が、

「あのけしからん絵を描いたのはお前か！」と詰問した時、

「描いたのは俺だが、やったのはお前たちだ！」と言い返したという。

マドリード最後の夜、コラル・デ・ラ・モレリアへスペイン第一というフラメンコを見に行きました。唄もギターも踊りも、全てが素晴らしい。ギターの“弦が火を吹く”といわれ、激しい踊りの足はまるで“けいれん”しているよう。ただこの夜のショウは、カスタネットを全く使わなかったのが不思議だった。

２２時に始まって終わったのは午前３時でした。

それにしても片道１８時間半に及ぶ飛行機の旅はなんとしても疲れます。だから、もうこりごり？？ではなくて、だから体の動く内にもっと行こう、となります。

地球人に生まれたのだから、地球を見ないで死んでなるものか！をモットーに。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

会計報告

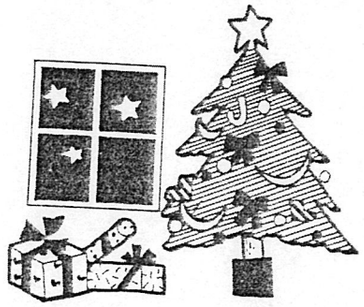
	摘要	収入	支出	残高
９１．９．５	繰り越し			４２，８２０
〃	コピー代（７３号）		３，４５０	３９，３７０
〃	切手代		５，７６６	３３，６０４
９．１１	切手のカンパ	９３０円分		
１０．４	カンパ	１，０００		３４，６０４

投稿、有り難うございました。では、次号をお楽しみに！

アストロラマ　Ｎｏ．７５

発行者　桑原由紀子　生駒市上町９－１２　☎０７４３７－８－１９６９

１９９１．１２．１５



ハーイ！皆様、お元気ですか？　年の瀬をいかがお過ごしでしょうか？

１９９１年もあとわづか、きりのいい７５号で終えようと、発行することにしました。

といっても、原稿はまったくなし・・・

秋山さん、サイドストーリーはまだですか？　突撃レポーターの具子さん、生きてる？なんて言いたくなるほど、皆さんお忙しいようで・・・仕方がないから、思いつくまま書きますょ。

燃えてる「邦楽アンサンブル彩」

１０月に奈良県の芸術祭に参加してコンサートを開いた「彩」ですが、そのとき聴きに来て下さつた、県文化課の方に気に入られ、来年は正月早々、奈良県新公会堂で催される

「わかくさ能」の前座・・といえば聞こえがいいけど、能を見にきたお客様に、時間までロビーでお琴の生演奏を聴いていただこうということになり、「彩」がやらせていただくことになった次第です。

新公会堂は、奈良公園の中にあり、とても立派な建物です。５００人収容の能舞台のついたホールがあり、「彩」もこんなところでコンサートがやれたらなぁなんてタメ息がでます。でも、ロビーとはいっても、県からの仕事、メンバーは大喜びで、練習に精を出しています。

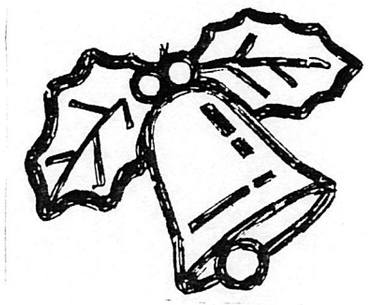
なお、「わかくさ能」は、１月５日、昼の部１時から、夜の部５時からです。

また、大和高田市の愛恵幼稚園からは、クリスマス会にお琴の演奏をと頼まれ、例の「花さき山」を語りとスライド付きでやったり、子供たちに歌ってもらって、ドラエモン、サザエさん、となりのトトロのアニメシリーズを琴と十七弦で、最後はクリスマス会らしく、あわてんぼうのサンタクロースを・・・などと楽しい企画をして喜ばれました。

お琴を通じて、子供たちに日本の楽器を紹介したり、すてきなお母さんと、お友達になったり・・

子供たちはもちろん、お母さんたちも、お琴や十七弦を側で見るのは初めてとか、生の音をきいたのは初めてです・・というかたが多く、私たちももっともっと知らせていきたいなと思っています。

とにかく、やってる本人が思いきり、楽しんで、それが音楽の楽しさとなって、相手に伝わればいいなと思います。



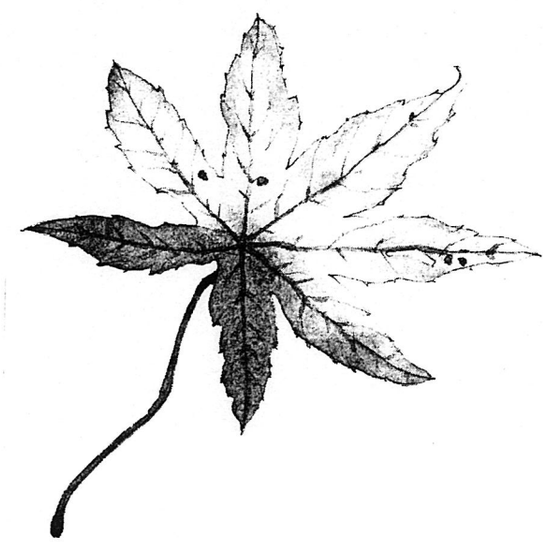
世論時報社からの電話

お稽古をしていたある日、一本の電話。何と、『世論時報』の編集長様から原稿の依頼です。思わず「エーッ、ウッソー」って言ってしまいました。

美保さんに教えていただいて『世論時報』を読むようになりました。

アストロラマでも言っているように、読むだけよりも参加した方がもっと楽しめると思って、時々、好き勝手な感想を送ったり、それがまた誌上に載ったりすると嬉しくて、書くことも結構面白いなと思っていたけれど、いざ頼まれてとなると、初めてのことでどうなることかと思いました。

「じゃ、何とか書いてみます」って答えたものの、こんなのいつまでもかかえていては、お稽古にも身が入らないし、やっぱりアストロラマの要領でおもいつくまま、書いて出しました。



何日かたって、編集長から封書が・・・ドキドキして開けてみると、
まあ「よく書けています。」とお褒めの言葉。
プロの物を書く人にほめられて、嬉しくなって、またまたアストロラマに書いてしまいました。
ということで、皆様もアストロラマと併せて、『世論時報』も読んでみて下さい。
一冊４５０円です。
「美保子の地球にやさしく」も載っています・・・とこれじゃコマーシャルですね。

新しいワープロ「文豪ＭＩＮＩ」

ワープロとは何たるかも知らないまま、電気屋さんへ行って、「ファミリー書院」を買ったのが、５年前。アストロラマをもう少し、読みやすい誌面にとおもって、説明書と首っ引きで何とか、使えるようになったものの、今度はもっと賢い機械が欲しくなってまた電気屋さんへ。
今度のは「文豪ＭＩＮＩ」、印刷は早いし、フロッピーもついているし、何よりもタックシールが簡単に作れるのが嬉しい。

無駄な買い方・・・と思わないでもないけど、私にとっては、「書院」で少し慣れていたから、「文豪」も説明書だけで何とか使えるようになったかナと思う。
いろんな機能があって、まだまだ使いこなすには程遠いが、実用的で実に面白いおもちゃ（？）ができたと喜んでいる。

会計報告

	摘要	収入	支出	残高
９１．１０．	繰り越し			３４，６０４
１０．２５	コピー代（７４号）		３，７５０	３０，８４６
〃	切手代		７，３１６	２３，５３０
１２．８	カンパ	５，０００		２８，５３０

アストロラマの大ファンから、たくさんのカンパを有り難うございました。

わらび座のクロちゃんとわらびっ子

４年位前になるかな、お正月を秋田で過ごし、大阪に帰る夜行列車「日本海」の中で、退屈していた沙代子と遊んでくれたのが、わらび座のクロちゃんこと黒田さん夫妻だった。
その時初めて、わらび座のことを聞き、何となくヤマギシの村に似てるなと思った。
先日、生駒の中央公民館で公演があるからと連絡があり、じゃ泊まりにおいでょということになり、４年振りに会った。会うのは二回目なのに、妙に懐かしい気がした。
演劇を通して、真の生き方を伝えるクロちゃん達の生き方にも惹かれるものがあるが、わらびっ子として、スクスク育っている一粒種の未来ちゃん（３才）にも興味があった。
一年間ヤマギシの幼年部に沙代子を送っていなかったら、クロちゃん達の子供に対する思いは、理解できなかったかもしれないが、二人からわらびっ子の育ちを聞いて、やっぱり子供って群れて育ち合うのがいいんだなって思えた。

座員が協同生活しているわらび座では、座員の子供は、保育専任の人がついてみてくれるので、安心して地方公演にも行けるという。幼年部に放した体験がなかったら、こんな小さいうちから、親の側を離れてかわいそうにと思ったかもしれない。
しかし、子供は群れて育ち合うのが最良と実感した今、わらびっ子は幸せだなあって心から思える。
今、親の好みのブランド物で飾りたて、高価なおもちゃを次々買い与え、まるでペットじゃないかと思うような、かわいそうな子供がいる中、楽園村でキラッと輝いた子供たちの感想文に出あった。
すべての子供たちがこんなすてきな体験　できたらいいなと思いながら・・・

ほんとうの○○・・・（小６　男子）

五感散歩が一番印象に残った。
動物については、見る、臭う、聞くことは動物園でもできる。しかし、触れる、実際に世話をしてみるというようなことは、この地球で、たぶんこの楽園村でしかできないだろう。
本当の牛の鳴き声。本当のぶたの鳴き声。本当の鶏の鳴き声。本当のひよこの鳴き声。
みんな本当。

野菜については、スーパーマーケットやデパートで売っているような野菜と全然ちがう。本当のトマトの味。本当のミニトマトの味。本当のキュウリの味。本当のさつまいもの味。本当のかぼちゃの味。本当のたまねぎの味。本当のなすの味。本当のにんじんの味。本当のとうもろこしの味。本当のすいかの味。本当のしその味。みんな本当。

ヤマギシの五感散歩は、非常に五感を働かせる。ぼくは五感散歩がだいすきです。

こんな世界をつくろう・・・増田華苗（小６）

私は、この一週間いろんなことを思いっ切りやってきた。中でもお山の運動会では、みんなで仲よくけんさんして元気にできたと思う。私は、お姉さん役をやらせてもらい、小さい子と手をつないでいったり、長なわの時、かけ声をかけたりしました。

はじめて会ったばかりなのに、まるで家族や兄弟のようでした。本当に、妹や弟がかわいく思えました。だから弟や妹も「はい」や「うん」と、言うことを聞いてくれます。

「気がつけば兄弟、さあ仲よしの練習だ」ということはこういうことなんだなと、自分で体験しながら知りました。

学校でもこのテーマだと、低学年の子たちは私の妹、弟で、男の子も女の子も仲よしで、もちろんけんかはないし、先生もおこらないこんな学校、もしかしたらできるかもしれない。

日本が、世界が、うちゅうが、みんな兄弟で仲がよくなるかもしれない。そんな世の中が一日も早くくればいいけど、やってくるものじゃないから、だれかがつくらなければいけない。そのだれかは自分で私だということを、よく自覚した。

そして、明日から私のまわりの小さなこと、たとえば友達を楽園村につれて来ること、いつもにこにこすること、お母さんに用事をたのまれると、「はいっ」といって楽しく用事をすることたくさんある。そんなことを、本気で、自己最高に取り組んでいきたいと本当に思った。また、もしバカにされても自分はやるということで、一人でも思いっきりやっていきたい。この一週間をきっかけに今からやっていきます。

自分を出して思いっきり・・・佐藤洋子（中１）

私は最初来る時、行っても行かなくてもいいやって思っていたけど、一週間過ごして、ほんとにきてよかったって思った。毎日毎日がすごく楽しかった。友達から兄弟になってほんとの兄弟のように遊んだり食べたり、寝たり、お風呂に入ったりして。

家ではただ、いい子に見られたいとか、イヤだけどたのまれたからといろいろやってたけど、楽園村では、自分からおもしろそうとか、やってみたいとか、何かをやってどんどん自分を出していけた。思いっきりやれた。

家でいやだったことも今考えると、すごく楽しくできることだと思った。

今までほんとは楽しいのに、自分がイヤなこと、やりたくないことに変えていたと思う。楽園村はことばではいえないけど、すごくおもいっきりやれる場だと思う。

私がこの一週間過ごしてみて、心にのこったこと、できるようになったことはいっぱいある。

私がすごくうれしかったことは、おにぎりをにぎれるようになったこと。

私がおにぎりをにぎると、丸くなったり、ボロボロしてしまう。楽園村でおにぎりを作った時、まわりの人がほとんど中等部の人だった。

私がおにぎりをにぎれないと言ったら、すごくやさしくおしえてくれた。けどあまりじょうずにできなくて・・・そしたら中等部の人がにぎってくれた。

おにぎりをもたしてくれて、「こんなかんじだよ」って。

そいで、私ちゃんと三角のおにぎりをにぎれてすごくうれしかった。

他にもいっぱい、いっぱいうれしいことあった。できるようになったこともあった。

もっともっと書きたいけど、たぶん書ききれないから・・・・。

一週間の中で、私が本当の自分を見つけた。私は家にかえっても本当の自分でいたい。

そしてまた、楽園村に帰ってきたい。

一週間すごく楽しかった。

大人も子供も、新しい発見は感動的なものですね。

楽園村はまさに、その発見の場のようです。どんなことでも、「誰かがやってくれる」ではなくて「私がやるんだ」って気付くことってすごいですね。

こんな子供たちが、やがてこの地球を守っていくんだなぁと思うと、嬉しくなりませんか？

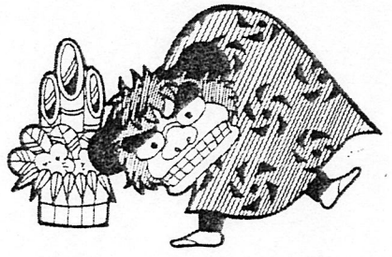
では、今年最後のアストロラマでした。

皆様、よいお年をお迎え下さい。来年もどうぞよろしくお願いします。

アストロラマ　ＮＯ．７６

発行者　桑原由紀子　生駒市上町９－１２　☎０７４３７－８－１９６９

１９９２．２．１



皆様こんにちわ。１９９２年も明けたと思ったら、はや１２分の１が過ぎたわけですね。

今年は皆様にとってどんな幕明けだったでしょうか？

我が家では、今年も思い出深いというか、前途多難というか・・・

暮れから、夫　仙山さんはネパールへ演奏旅行。義母は千葉の姉宅へ。私と沙代子は北陸の温泉地でそれぞれ新年を迎えました。

熟年（？）の仙山さん、益々芸にも磨きがかかってコンサートの依頼も増え、その分家族とともに過ごす時間が減りつつあるわけです。

家族といえば、１５年ともに暮らしてきたマルチーズのジョイ君、昨年は義母の指を噛みきって被害をこうむったのが、正月２日に眠るように亡くなってしまいました。

また、暮れから入院していた実家の父が二度目の手術・・・と何だか新年早々から暗雲たれこめてるって感じの桑原家・・・ですが、

「芸は身を助ける」（意味が違うか？？？）お互い「あうん」に「彩」にとそれぞれの趣味に忙しくしているこの頃です。

アストロラマ読者の皆様からたくさんの賀状もいただき、有り難うございました。一言書いて下さった中から・・・

大好きな西宮重和さんからは、スバラシイ笑顔のご夫婦の写真付き。こんなふうになれたらいいなと、ときどきながめています。昨今の心境は、

「日日是好日」「無事是貴人」「生涯勉強」だそうです。

昨年はほとんど沈黙のレポーターだったモグこと末松具子さんの今年の目標は、

一つ、体重を減らすこと。

二つ、海外旅行にいくこと。

三つ、ゴルフ・ワープロの上達・・・だそうで、しっかり着実にワープロ講座にも通っている具子さんです。

具子さん、お互いがんばろうね。また、にぎやかなレポートを楽しみにしています。

チェコスロバキアの民話「白いお姫さま」を翻訳された、元住友童話館の**中村裕子**さんも「白いお姫様を訪ねて」というチェコ紀行文を一冊の本にして、新読書社から今春、出版されるそうです。

美保さんのチェコ紀行と合わせて読んでみたいナと思います。

内川敦子さんからは、「通信費を払うので、アストロラマを送って下さい」内川さんごめんなさい。タックシールがもれていたんですね。数が多いもので、気がつかなかったようです。ごめんなさいね。これから喜んで送らせていただきます。

なお内川さんの新住所は、

〒５６５　豊中市上新田１－２５－Ｈ－１１１１です。

お近くの方、よろしく！

（財）千里老人文化センターで楽しみながら働いていらっしゃる**神谷省次**さん、「人生の先輩に囲まれて、６１才はヒヨコを痛感」とか・・・じゃ私などはまだ　卵　かな？　あひるになるやら白鳥になるやら・・・楽しみになってきました。

最後に**中川久子**さん、ご主人がサンフランシスコへ転勤になり、渡米されました。

いつもすてきな笑顔の久子さん、東京の皆様には、送別会をしていただき、懐かしい方にもお会いできたと、とても喜んでいらっしゃいました。いつお帰りになっても「変わらないアストロラマの輪」を続けていたいですね。

さて私はというと、先日、京都一燈園の石川　洋氏の講演を聞かせていただきました。お話しの中で特に心に残った言葉「会った人はすべて友達」「人生は自分持ち」「感謝にまさる能力はない」「私は桑原山幸福寺の住職です」・・・こんな言葉を胸に１年生きてみます。

泥かぶら

昔、貧しい山村にみなし子の少女がいました。いつも汚い身なりをしているので、「泥かぶら泥かぶら」と呼ばれていました。

泥かぶらというのは、泥をかぶったようなきたない子という意味です。

誰からも相手にされないというのは、とても悲しいことです。もう生きる望みもなく悲しんでいたある日、白髪のおじいさんが現われて、

「どうしてそんな悲しい顔をしているんだ」

と声をかけられました。いつも無視されていた少女は、そんな風に声をかけられたのははじめてのことです。つらい悲しいわけを話すと、おじいさんは

「じゃ幸福（しあわせ）になれる三つの約束を教えてあげよう。」といいました。

「一つめは、自分をみじめだと思わないこと。

二つめは、笑顔を絶やさないこと。

三つめは、お手伝いをすること。やれることからやってごらん」

少女は

「そんなこととてもむつかしくてできないよ」というと、おじいさんは

「お手伝いくらいならできるだろう」といいました。

少女は村に行って

「子守をさせて下さい。洗濯させて下さい。掃除させて下さい。」といって回った。

しかし、村の人は

「おまえなんかに子守してもらっては、ノミがうつるよ」

「洗濯？おまえが？汚らしい」といって相手にしてくれない。それでも少女は根気よく毎日

「なにかお手伝いさせて下さい。」といって回った。そうしているうちに、村の人達もボツボツ用事を頼むようになった。

ある不作の年、年貢が収められない家の娘が町に売られていくことになり、親子ともに泣いていた。そこへ泥かぶらがやってきて、

「私が身代わりになりましょう。私には泣いてくれる親もいないのだから」と言って身代わりをかってでました。村の人々は驚き、泥かぶらに頭をさげた。

人買いにつれられ村を出ようとするころ、村のこどもたちが集まってきて、荷車をとり囲み「お姉ちゃんをつれて行かないで。」と泣き叫び、荷車は一歩も動けなくなった人買いは用を思い出したといってどこかへ行ってかえってこない。

気がつくと一片の紙きれが・・・そこにはこんなに子供たちに慕われている子をつれては行けない。・・・とかいてあったそうな。

京都一燈園の石川　洋氏のお話でした。

コンサートへのお誘い

年一回、春３月に続けている「あうん」のコンサート。回を重ねて５回目となりました。男３人で作る「あうん」のコンサートは、

３月７日（土）

朝日生命ホールにて（中央区高麗橋、朝日生命ビル８Ｆ）

開場３時半、**開演４時～６時**（終演予定）

で開かれます。

「彩」とはひと味違う、尺八主体の会です。

早春の午後、邦楽を聴きにいらっしゃいませんか？

ご一報下されば、チケットは受付に預けておきます。

と、まず「あうん」のコマーシャルに続いては、

「**邦楽アンサンブル彩**」の活動報告です。

昨年１２月２５日、平真知子さんはじめ仲良しを深めたい親と子からなる「ひろばの会」と「邦楽アンサンブル彩」とがドッキングしてすてきなクリスマス会を催しました。場所はあすか野集会所。地元あすか野で何かやりたいねと常々、平真知子さんとしゃべっていたところ、「ひろばの会」のメンバーがとつじょ動きはじめ、といってもエンジンがかかったのは、わづか２週間前というあわただしさだったが、そこはすばらしい仲間のこと、どんどん役割分担も決まり、企画を考える人、チラシを作る人、配る人、ポスターをかく人、人集めをする人・・・「彩」のメンバーはただ練習をするだけで、当日を迎えてびっくり。

会場は持ち寄った品物でクリスマスの飾りつけがなされ、和室には「ひろばの会」の仲間が一年かけて学習してきた絵やパッチワークなど手作り品が展示され、会場は親子づれでいっぱい。

平真知子さん、桃子ちゃんによるパネルシアター。ブラックライトで絵を浮かび上がらせ、しばし幻想的な世界へ。

その後は、「ひろばの会」のお母さん達でできた、にわか劇団五季（劇団四季の向こうをはって）による寸劇。寝ぼうしたサンタクロースが自分の衣装を捜すのだけどなかなか見つからないというお話し。何も知らない子供達、自分の母親の役者ぶりにびっくり仰天。大爆笑のうちに寸劇が終わり、「彩」のミニコンサート。

「彩」のおはことなった子供向けメニューを演奏。地域の親と子が一緒に作りあげたこのクリスマス会にみんな大感激。仲良しっていいなァと思えた一日でした。

そして、新年早々５日には、奈良県新公会堂での演奏も無事に終えて、１３日には大阪ロイヤルホテルである会社のパーティー会場で生演奏をさせていただきました。

今年７月には、生協主催によるコンサートへの出演も決まって、練習にも熱が入ります。

また、「彩」は同じ邦楽仲間の仲良しの輪も広げたいと、

１１月３日、テイジンミニホールにて合同コンサートも企画中・・・ということで、このアストロラマの紙面も随分「彩」の話題が占めるようになってきましたね。

皆様からの楽しい話題も待っています。

会計報告

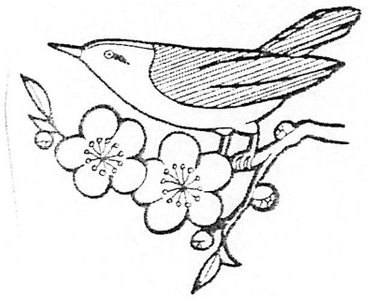
	摘要	収入	支出	残高
９１．１２	繰り越し			２８，５３０
１２．１５	コピー代（７５号）		３，６２０	２４，９１０
〃	切手代		７，４４０	１７，４７０
１２．２６	カンパ（切手）	６２０円分		

～～～

アストロラマ　Ｎｏ．７７

発行者　桑原由紀子　生駒市上町９－１２　☎０７４３７－８－１９６９

１９９２．３．２０



ポカポカ陽気のうちに、お水取りも終わり、どっちを向いても、もう春ですね。

昨年の今頃、沙代子も六川の幼年部を出発してきたんだなぁと懐かしく思い出しています。

さて、皆様のほうはいかがお過ごしでしょうか？
卒業、進学、入学とあわただしい時期と思います。

早い方は、そろそろ子供さんが結婚・・・なんて方もいらっしゃるのでは？？
万博が終わってもう２２年もたつんですね。「私達の万博」を知らない世代が増えて、ほんとに年取ったものだと思います。気はいつでも若いんだけど・・・

園児たちとの楽しい交流

昨年は、大和高田市の愛恵幼稚園で、今年は大阪市立伝法幼稚園で、「花さき山」を演奏する機会に恵まれました。今回はおひなまつりということもあり、会場には立派なおひなさまが飾られ、私たちはその前で演奏。園児たちは前もって先生たちから、「花さき山」のお話しを聞いていて、目はスライド、耳は語りと音楽をしっかり聞いてくれました。

あまり静かに聞いてくれたので、園長先生も驚かれた程でした。大好きなお琴を通じて、こんなひとときが持てることだけでも、とってもしあわせなのに、子供たちは、私たちが与えたより２倍も３倍もの喜びを、すばらしい絵や感想文にして返してくれます。

そんな子供たちからのお手紙、紹介したいと思います。

☆☆☆☆☆

きれいでした。またきかせてください。
はなさきやまの、いちばんよかったところは、おんなのこが、はなをさかしたところです。また、はなさきやまのはなしをしてください。

また、わたしもやさしいことをして、きれいなはなをさかせます。

おばさんたち、きれいでした。しゃくはちありがとうございました。また、でんぽうようちえんにきてください。まっています。

☆☆☆☆☆

★★★★★

はなさきやま、とってもおもしろかったです。
おことや、しゃくはちのきょく、とってもきれいでした。わたしは、ピアノをならっています。おばさんや、おじさんみたいに、がんばってじょうずになります。

★★★★★

☆☆☆☆☆

はなさきやまのおはなし、おもしろかったです。またみせてください。
おこと、しゃくはちもじょうずでした。ちいさいときも、しゃくはちならってたのですか

きものも、きれいかったです。

わたしも、やさしくなって、はなをさかせたいです。

☆☆☆☆☆

★★★★★

みなさんのがっきが、きれいかったです。おじさん、しゃくはちのふきかたおしえてください。まっときますから、きてください。

★★★★★

などなど・・・・こどもの素直な気持ちにふれ、うれしいかぎりです。

子供を持って特に感じるようになった、「地球の未来」「子供たちの未来」・・
この子たちがしあわせに生きるために、私達は今、地球をまもり、平和な世界をつくらなければ・・・と切に思うこの頃です。

私が育った山村にゴミ収集車はなかった

桑原由紀子（42）奈良県生駒市在住

増え続けるゴミを減らすため、いろんな人がいろんな工夫をし、それなりの成果は出ていると思う。しかし、ゴミに限らず「地球を守ろう」「限りある資源を大切に」「教育改革を」などと、あらゆる分野で見直しが叫ばれている今、私達は、もっと根っこの部分に目を向けなければならないのではと思う。

それは、季節の巡りが逆になったわけでもなく、地球が小さくなったわけでもなく、唯一変わったのは、「人」だけではないかと思えるからです。

私が育った山村では、ゴミ収集車など見たことがなかった。ゴミがなかったわけではないと思うが、燃やしたり、土に返したり、家畜のエサになったりと、最後まで活かして使いきっていたのだろう。衣類でも、お下がりを着たり、全く別のものに形を変えたり、どこの家でも、そんな暮らしが当たり前だった。

今の社会を作っている大人は、誰でもこんな体験をしてきていると思うのに、同じ人間がなぜこんなにも変わってしまうのだろうか。

買い物をすれば二重、三重に包装し、売らんがために見映えばかりを考える企業、またそれに踊らされる私達消費者、本当に必要なものは何か、作る側と使う側が一体になって考えていかなければと思う。

私の母は、マンションの管理人をしているが、住人の移動があるたびに、ゴミとして出される家具類や、電気製品の多さに驚いている。不要品に囲まれて生活するより、きれいさっぱり処分してすっきり暮らすのが、今風なのかもしれないが、捨てる前に活用する方法を考えられないものかと思う。

昔人間の母など、まだまだ使える物をゴミにする人達のことをあきれたり、嘆いたり。

引越しの後のゴミの山から、まだ十分使えるものを取り出して、必要とする人に使ってもらい喜ばれている。わが家の本箱やサイドボード、照明器具などもその類（たぐい）である。

とても母一人ではさばききれないゴミと呼べないゴミ……。洗濯機、冷蔵庫、自転車など、母が管理しているマンションだけでなく、粗大ゴミ置場を探せば、すぐにでも生活ができる程使えるゴミがいっぱいである。

本当にこんな暮らし方をしていていいのだろうか。男も女も、生産者も消費者も、一人一人が考えなければいけないと思う。

豊かな暮らしに比例してゴミも増えていく。暮らしが変わったから？イヤやっぱり人間の生き方が変わってきたのだと思う。

豊かな村で、豊かな生活をしている村がある。自然と動物と人々が一体になって生活をしているこの村では、一人一人が、物も人も、百パーセント活かし、活かされる生き方を実践している。どんなに豊かな社会になっても、どんなに科学が発達しても、人間そのものが本当の生き方をしないかぎり、いつかしっぺ返しが来るのではないだろうか。ゴミについて考えていたのに、それを作っている人間について考えてしまった。

ゴミを増やすのも減らすのも人間なのだから、当然といえば当然だが……。

そんなことを考えながらわが身を振り返ると、反省すべき点もいっぱい見えてきた。

老化防止のためにも、わが家のゴミをできるだけゴミにしないで、有効利用の方法を考えよう。

（くわはら・ゆきこ）

がらくた座のチィおばさんのこと

「さまよいつづけるこども心を呼び戻すよに、がらくたあつめて人形劇屋になりました。」

という、長野県松本市在住の木島千草さん、たった一人の人形劇「がらくた座」を日本各地で公演していらっしゃいます。その、チィおばさんの人形劇を見る機会に恵まれ、見れただけでも大感激なのに、千草さんと親しくお話することまで、してしまいました。

たった一人なのに、大人も子供も劇の世界・・・子供の頃のあの世界に知らず知らずひきこまれている。千草さんの生き方が、そのまま人形劇に現われていて、いっぺんに大ファンになってしまいました。

物を大事にし、最後まで活かしきって使い、それを楽しみに変えていくというすばらしい方でした。皆様の近くで公演があれば、ぜひ見て下さいとお薦めしたいです。

一人では何もできないと、思いがちな私たち。千草さんをみてると、小さな身体で大きな荷物かついで、どこにそんなパワーがあるのかしらと感心してしまいました。

本当にやりたいことは、一人ででも、できるものだなと改めて思った次第です。

世論時報に載ったよ

７５号で書いていた、世論時報への原稿が、２月号に掲載されました。

神谷さんから「良かったよ」と言われ、美保さんからは「アストロラマに是非載せなさいよ」と言われ、なんだかいっぱしの物書きになった気分。

世論時報を読んでいない方のために・・・というか、どうせアストロラマに出るだろうと待ってたかたのために（ナントいう勝手な解釈と怒らないで）

次ページにのせましたので、読んでみて下さい。

物を書く人の身内は、いつなんどき自分のことを書かれるやとビクビクするとか、きいたことが、あるのですが、うちの母も同じだったようです。

「お母さんのこと書いたよ」って言ってたので母なりに掲載されるのを待っていたようです。

私のまわりには素敵な方がいっぱい。みんなアストロラマで紹介したくなります。無断で載せちゃうかもしれないけど、その節は笑って許してネ。

コンサートだより

「あうん」のコンサートも盛会のうちに無事おわりました。毎年聴いて下さっている浅井館長さんの奥様、神谷さん、今年も有難うございました。

アストロラマ仲間から、奥田さん、高橋さん、野田さんがきて下さり、久しぶりにお会いできて嬉しかったです。青木千里さんのお友達も数人、私も観客動員には少しばかり内助の功をはたしているようです。

皆様　ほんとに有難うございました。

さて、「邦楽アンサンブル彩」のほうですが、先日、地元の真弓集会所でミニコンサートを頼まれてやったところ、お琴のコンサートがこんなにも華やかなものとは、知らなかったというお客様の声。

「まったく違ったイメージをもっていました。」とか

「あれは、おじいちゃん、おばあちゃんのやるものと思っていました。」とかの声をきいて、「彩」のメンバー一同思わずニヤリ。

まさに、そんなことを期待して、まめにコンサート活動をやっているのですから・・・

初めての「アンコール、アンコール」の拍手にどぎまぎした「彩」でした。

そんなファンの期待に応えて、

５月３０日（土）
２：００〜３：３０
蘭館（うちの近くのガラス張りのしゃれた喫茶店）にて

ライブコンサートをやる予定です。

お寺では着れない衣装で、民謡、ポピュラーなどアレンジしたものをやってみたいと思っています。

会計報告

	摘要	収入	支出	残高
９２．２	繰越			１７，４７０
２．１	コピー代（７６号）		３，７５０	１３，７２０
	切手代		７，４４０	６，２８０
３．９	カンパ（切手）	５，０４０円分		

カンパ 有難うございました。

「美保さんと歩こう会」へのお誘い

大好きな美保さんからお便りがあり、「歩こう会」を企画してくださいとのこと、参加資格制限なしの、この「歩こう会」、行くたびに新しい顔が増えて嬉しいですね。

さて、今回は平真知子さんと私で、下記の通り決めてみました。

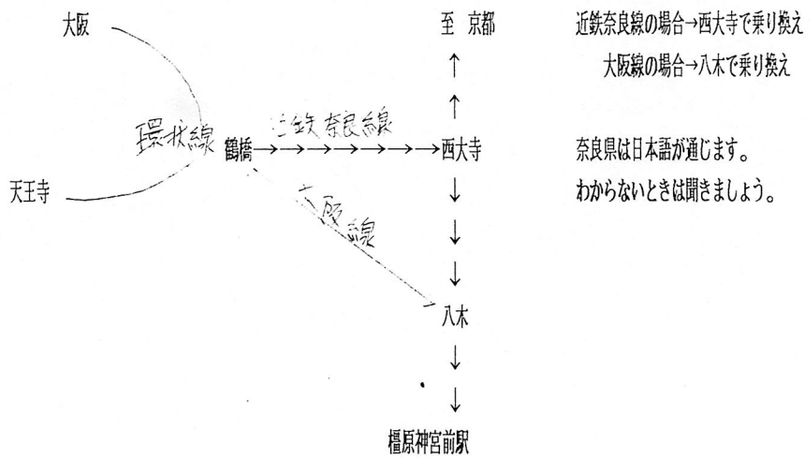
こんなことでもなければ奈良のほうに足が向かないという方、是非おでかけになってみませんか？

記

と　き・・・５月２４日（日）
集合時間・・午前１０：３０
集合場所・・橿原神宮前駅、東口出口
（近鉄橿原線）（10:41のバスに乗ります。次は、11:39になるので遅れないように）
持ち物・・・お弁当、飲み物
コース・・・飛鳥コース
橿原神宮前駅東口→剣池→豊浦寺跡→甘橿丘

甘橿丘（あまかしのおか）

万葉の里の展望台、眼下には飛鳥の里。また大和三山や青垣の山々も遠望。自ずと詩ごころ、絵ごころがわいてくる。



甘橿丘で古代を偲びながら、美保さんのとのおしゃべりを楽しもう！

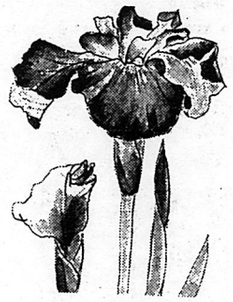
雨の場合は近くの茶店にでも・・・問い合わせは、０７４３７－８－１９６９（桑原）

アストロラマ　Ｎｏ．７８

発行者　桑原由紀子　生駒市上町９－１２　☎０７４３７－８－１９６９

１９９２．５．１

なたね梅雨・・・何ともきれいな呼びかただけれど、それにしても春休みの間よく降ったなぁって感じですね。そんななたね梅雨の合い間の晴れた一日、満開の桜の下で花見を楽しみ、新学期も始まりました。



皆様より出遅れること１０年の私も、今人並にＰ．Ｔ．Ａ．の役もさせていただき、昨年はクラス委員長、今年は本部副会長という仕事をさせていただいてます。アストロラマの読者の方達もひと通り歩いてこられた道だと思いますが、私も今改めて、生涯勉強、笑顔を絶やさず、私にできるお手伝い（仕事）をさせていただくという気持ちで、この１年、Ｐ．Ｔ．Ａ．大学（？）で学んでいこうと思っているところです。

学校にかかわってみて、子供を学校へ送っていながら、あとは知らん顔の親が多いのに驚いています。**親、地域社会、学校**は、子供を育てていく上で大切な３本柱だと思うのですが・・・先輩の皆様方、またいろいろ教えて下さいませせ。

そんなわけで、今年のアストロラマはＰ．Ｔ．Ａ．の話題が増えるかも・・・？

まず最初に　**お知らせ**　から

① **宮川季子**さん（矢上）の住所が変わりました。

新住所・・・横浜市港南区日野町２３００－１３
☎　０４５－８３５－２１４５です

心やさしい東京組の皆様、みどり館では、タイ語の通訳として活躍されたタイちゃんこと、季子さんです。よろしくお願いします。

② 美保さんこと**杉原美保子さん**が、フォーラム「地球にやさしい世界の仲間たち」で講演されます。

テーマは　**「各国のリサイクル事情」**

時間、場所、申し込み方法は下記の通りです。美保さんはとても魅力的でお会いするだけで、力がわいてくるような方です。東京の皆様、この機会に美保さんに会ってみませんか？

なお、このフォーラムの企画は、世論時報の河田さんで、お手伝いして下さるのが、宮木宏之さんだそうでお二人とも、アストロラマの愛読者です。私もこのアストロラマで、なにかお手伝いしたいなと思い、１０日に間に合うように発行することにしました。

記

’９２年５月１０日（日）　１時半～３時半

津田ホール　Ｔ１０５にて　☎３４０２－１８５１
（渋谷区千駄ケ谷１――１８－２４　千駄ケ谷駅・徒歩１分）
参加費　**１，０００円**（お茶代含む）

申し込みは　ハガキまたはＦＡＸで住所、氏名、電話番号、「フォーラム・地球にやさしい世界の仲間たち」参加希望と書いて、

〒１３１東京都墨田区八広２－１－１７－４０１
ＣＲＡ気付「フォーラム」係
☎　０３－３６１８－０１４１
ＦＡＸ　０３－３６１８－０１４２まで送ります。

③ お知らせの最後はヤマギシの**タダのまつり**です

毎年、５月３日に行なわれる、「タダのまつり」に行ってみませんか？
なにをするにもお金、人のこころもゆがめてしまうお金、とにかくお金、お金の今、**お金を使うところが無い**まつり。
そんなまつりが実際にあるなんて、信じられない・・・そうおもいませんか？
でも、ほんとうにあるんです。百聞は一見にしかず・・・チラシを同封しておきますので、その先の行動は　あなた次第　です。
日本中、イヤ海外からもたくさんの人たちがやってきます。まつりを作る為に。

さて今度は、山形県長井市在住の佐藤美千さんの文を紹介したいと思います。美千さんとは、私自身まだお会いしたことはないのですが、夫、仙山が大変お世話になったのが縁で、アストロラマを送らせていただいてます。

お便り全体に暖かい心があふれていて、とってもステキなお母さんみたいな方かなぁと想像しているアストロラマ読者の一人です。

「新聞ならぬ新聞紙」

佐藤美千

昔、それは戦争の真っ只中であった。おおよそ４０数年も前のことである。
石垣綾子先生の講演を聴く機会があった。（すこし省略させていただきました。）

その概要はこうであった。百合の花、それは一家を支える女の顔の様なもので、根は見えざるところで家庭を守る強く温かい母の様なものだと当時銃後の護りに当たる女達への励ましの言葉であった。当時はテレビはもちろん有るはずもなく、新聞を取ってる家さえまばらであった。特別な記事が載ればお向かいから借りてきて読ませてもらっている時代であった。そんな時代ですから、当然農家の女は新聞を広々と広げて読んでなど居られない時代であった。そこで先生のお話は

「女は一日中忙しく立ち働き新聞など、とうてい読んでる閑も無い、だが一日遅れでも二日遅れでもかまわない、新聞ではなく新聞紙でいい。新聞紙に目を通す習慣を身につけてほしい。」と、それは力説であった。

銃後の護りに腰をかがめて土も耕さねばならぬ、だが女は今もっともっと社会に目を向けねばならぬ時代になったのだと、男の庇護の許に息づいて来た当時の女達を目覚めさすべく懸命の呼び掛け、そこには先生のきらきらした輝きがあった。その輝きこそ４０数年前の忘れ得ぬ感動であった。ドイツの女性達の経済観念のこと等も話された。

無駄な電気など決して付けっぱなしなど無く、ドイツでは女達が国を守っているのだと・・

今は新聞に目を通さねば一日が始まらぬ時代ではあるけれども百合根の話と新聞紙の話は不思議にいまも鮮明に心に残っているのである。躍動感にあふれ、女の情熱を滾らせいくつかの恋も体験した先生であればこそ人の心を動かす情念が一言一言に溢れていたのかもしれません。今尚現役に身を置き老いを知らぬ石垣綾子先生の若き日の一齣の記憶である。

世は推移してあまりにも時代は豊か過ぎ飽食にあけくれ不用品の捨て場所にさえ困るという時代になった。それ故に心のどこかに置き忘れた空洞があるやも知れず新聞紙のなにか一枠を読むような想いでふっと何かを省み、置き忘れていたものに触れてみるのも捨てたものではないかも知れません。

千年の昔、人々はなにを思っていたのだろうか。そんな事を想いながら、正暦寺本堂で創建１千年の記念法要で「邦楽アンサンブル彩」の演奏を奉納させていただきました。

産經新聞　平成４年(1992年)４月２０日　月曜日

こちらは「菩提泉」酒

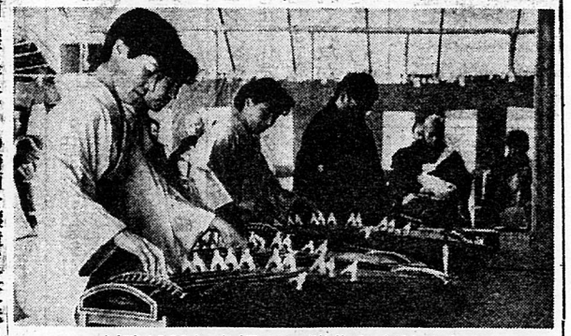
正暦寺で創建千年法要

日本初の清酒「菩提泉」を醸造したことでも知られる奈良市の菩提山真言宗大本山・正暦寺（大原正信住職）が今年創建千年を迎え、十九日、記念法要が盛大に行われた。あいにくの雨空にもかかわらず、全国から約千人の信者が参加した。

同寺は正暦三年（九九二）、一条天皇の勅願寺として兼俊僧正が創建した。治承四年（一一八〇）の南都焼き打ちの際に全焼し、一時は廃墟となった。その後、興福寺別当で関白藤原忠通の子の信円僧正が再興。以後も何度か戦火にあったが、室町時代に日本初の清酒を醸造、世に送りだすなど、隆盛を誇った。

この日は、午前と午後に本殿で正信住職、弘信住職と同寺の僧侶らが法要を営んだ。午後の部では、「三十二相」という創建以来の旋律を伝える声明が上げられ、初めて作られた時の方法で醸造した菩提泉酒を奉納した。

このほか、春日大社南都楽所の舞楽や、同寺で体でとなえる真言として伝わる仏の舞（ヨーガ）などの奉納があり、山深い境内は終日にぎわった。



創建1000年を祝って箏曲も奉納された

産經新聞　平成４年(1992年)４月１８日　土曜日

お年寄りが楽しいひとときの輪を広げる集い

生駒市でふれあい

生駒市内のお年寄りたちに楽しいひとときを過ごしてもらおうと「ふれあいの輪を広げる集い」が十七日、同市北新町の市中央公民館で約五十人が参加して開かれた。民謡や邦楽演奏などのアトラクションに目を奪われ、すっかり満足した様子だった。

集いは市内のボランティア団体「これからの福祉を考える会」（桜井明子代表）によって毎年行われている恒例行事。同会は核家族化が進むなか、世代を超えた交流の輪を広げていこうと昭和五十五年に発足した。六十五歳以上のお年寄りに手づくりのお弁当を届けるなど、心の福祉をテーマに活動を展開している。

この日は、あすか野民謡クラブと邦楽アンサンブル「彩」のメンバーがボランティアで出演。日ごろの練習の成果を存分に発揮しようと大張り切り。「北国の春」「珠洲山曳唄」など九曲の民謡、「さくら」「瀬戸の花嫁」などの琴の演奏を次々に披露し、お年寄りたちを楽しませた。

「邦楽アンサンブル彩」もいろんな場所で演奏させていただいてます。西宮さんからのお便りに、

『彩グループの演奏チャンスが次第に先方からの依頼で増えていることが嬉しいです。自分達の働きかけでしぶしぶ受けて下さるのではなくて、頼まれて出演するとは、ほんとに同慶の至りです。』

とあったのですが、私達もほんとに嬉しいかぎりです。

正暦寺を紹介して下さった、佐藤勇吉さんは、７７号の木島知草さん（前号の千草は間違いでした。）の事をみて、

「本当にやりたい事は一人ででもできる」の言葉にピクンと動かされ、
文集「縄文杉」の発行を始められたとか・・・

また、前出の佐藤美千さんからは、アストロラマをずっと綴って残しているのですが、○○号を人にあげちゃったので、コピーして送ってほしいとか・・・

美保さんからは、今度の歩こう会には、東京から宮木さんも参加されるそうよとか・・

こんな嬉しい話をいっぱい聴いて、ハレハレ気分のうちに７８号ができました。

紙面の都合で会計報告は次号に載せます。

万博みどり館　　於 天草パールライン九商展望台　S45.9.19

'84 11 6

佛蘭

翻訳

大阪・千里のグループ

"自由の熱気"にも触れ

昨夏訪問

民主化の波に揺れる東欧・チェコスロバキアに伝わる民話の本を、大阪府・千里ニュータウンの主婦グループが九年がかりでフランス語版から翻訳、来月出版される。一冊の本がきっかけで実際の男性は「あなたは自由に外国に行けてうらやましい」と語る一方、「近代化、自由化で自然が破壊されて

完成した本を前に喜ぶ（写真左から）矢野、中村、立花さん（大阪・吹田市で）

を四十分も止められて検問。乗客は全部外に出され、座席、網棚、持ち物など細かに調べられた。

出版社の扱う本は図鑑や絵本などが中心で、思想的なものはない。「自分たちが出したい本をつくりたい」と社員たち。町のレストランで知り合った歴史家

家庭とくらし

アストロラマ　No. 79

発行者　桑原由紀子　生駒市上町９－１２　☎０７４３７－８－１９６９
１９９２．６．２５

あじさい寺で有名な矢田寺へ行ってきました。バラが見事な霊山寺、あじさいと菖蒲が見頃の長弓寺・・・忙しい合間に、もの言わぬ花をながめると、気持ちがやすらぎます。

さて、皆様の方はいかがお過ごしでしょうか？「邦楽アンサンブル彩」では、蘭館でのコンサートも無事終わり、次は７月１２日奈良生協主催のすずらんコンサートに出演させていただくことになり、それに向けての練習に励んでいます。と同時に１０月１８日、奈良県芸術祭参加コンサートを企画して、ボツボツ準備にかかっているところです。

私の大好きなお友達・・・青木千里さんが、ＡＴＲとの契約が切れて静岡に帰られます。２年前バルサムを訪ねたことから千里さんを知る事になったのですが彼女からはとてもたくさんの事を教えていただきました。私の知らないひろ～い世界のこと、いろんな国のお友達のこと、またすてきな日本の女性のことなどなど・・・

今、そんな彼女が遠くにいっちゃうのが少し寂しいけれど、こんなすばらしい友を持てたことを、美保さんやバルサムのお陰と感謝しています。

さて、次はお友達といっては恐れ多い秋山智弘さん、遠くからいつもアストロラマの応援や心配をして下さって嬉しく思っています。その彼から久しぶりのお便り・・・毎号苦労してアストロラマの記事を書いているのがありあり見える。・・・そうで応援の原稿を送って下さいました。

すてきなアストロラマ仲間をもって感謝感激です。

有難うございます。神様、秋山さま。では思わず笑ってしまうサイドストーリーです。

間のびしたアストロラマサイドストーリー　6

ヴィーナスの胸毛

秋山智弘

アストロラマ「誕生」には、人類が文明の生産者である一方で、消費者でもあったことを描きたいと思っていた。

紀元前１７００年ごろ、エーゲ海のクレタ島を中心に栄えたギリシャ文明は哲学を生み壮大な宮殿やおびただしい美術作品を残した。

今も碧いエーゲ海の底には、そのころ沈んだ交易船があって、壺やエンタシスの柱や大理石の彫像が、水のゆらめく中で華やかな夢を見つづけているはずである。

アストロラマカメラを、この海に沈めて、古代のロマンを描き出したい。私は真剣にそう考えていた。

もの作りには制約がつきものだが、それを乗り越えて行くのが、創造者の道である、などといくら言っても、実現はなかなか難しいと思われた。

けれども、映像の中にエーゲ海のイメージだけは何としても欲しい。

そこで、海中撮影で経験豊富なカメラマン、岩間勇水君に相談を持ちかけた。

「アストロラマのあのカメラをそのまま海底まで入れられれば一番いいんですがね。なにしろ化物みたいに大きいですからね、耐圧防水の装置を新しく作らなきゃならない」

普段から生真面目な彼が、一層マジメな顔で言った。

「だけど、やってみたいですねえ。アストロラマの５面つなぎの画面を一面づつ別に撮影して、映写のときぴったり継がる編集はできますからね。それにしても大型の水中カメラが一台必要ですがね。」

「その大型カメラを探して、だれもやったことのない水中アストロラマ画面を作ろうじゃないか。」と私。

カメラ探しが始まった。普通の映画の２倍大の映像を撮影できて、海中で自由に操作できる能力をもつカメラ・・・

半年がかり。

あった。アメリカ海軍が海中調査に使う特殊カメラ。ひどく高価。プロデューサに無理を頼んで手に入れた。これでエーゲ海へ沈船さがしに行く費用はなくなってしまった

「でも、このカメラで立派な水中映像が撮れますよ。場所は潜水仲間で探します。日本の海だってエーゲ海につながっているんだから」

岩間カメラマンが嬉しそうに言った。

もともと岩間君は映画のカメラマンとは縁のない仕事をしていたらしい。それが、何かの拍子に、教育映画やドキュメンタリー映画を作る私達のチームに入ってきた。

がっちりした体とあどけないともいえる童顔の持ち主は、大変な努力家だった。

カメラ助手を努め、やがて一本立ちのカメラマンになった。私の演出で、一緒に何本か作品を作った。アストロラマの始まる数年前のことだった。

同じころ、私のアシスタントは畑正憲君だった。のちにムツゴロウ先生と呼ばれるようになる。彼は、フランスのクストー監督を越える海の映画を作るのが悲願だった。

ある日、畑君が私のところへやってきた。

「これからは海の時代です。今までの日本の海底映画は、まるでアマチュアでだめです ボクはカメラマンと一緒に海に潜りたい。ボクの眼で何を撮るべきかを決めて演出したいんです。ボクとカメラマンにダイビングの資格を取らせて下さい。その上で、すごい海中映画を作りたいんです。」

畑君が一緒に潜りたいと名前をあげたカメラマンが岩間君だった。理由は・・・

畑君は、対話をしている最中に、突然、相手の股間に手をのばし、男性をぎゅっと握ってみる変なクセがある。不意うちをくらって、たいていの男があわててしまう。

畑君は岩間君にそいつをやったらしい。

「あの男は大丈夫です。いつでも堅くて男らしい。海に潜ったら命がけですからね。本当に信頼できる相棒が必要なんです。」

畑君の期待にたがわず、海の無い山梨県生まれの岩間君は、立派な水中カメラマンになった。このペアは、当時話題になる海の映画をいくつか世に送り、たくさんの映画賞を取った。

アストロラマの水中撮影現場は、意外にも伊豆半島で見つかった。演出、美術、撮影のスタッフは１６人。美術店や古物商で時代考証の上買い集めたレプリカがトラック１台分

アクアポリスの柱やミケーネの壺が、白砂の海底に程よく植え込まれる。純白のヴィーナス像に、海面から差し込む陽光が美しい縞模様をつくる。とはいえ、大自然の海の中は、常に状況が変わってゆく。スクリーンに映したとき、全体が同じブルーに統一されていなければならないから、撮影は天候、波、風との戦いになる。撮影済みのフィルムは早速東京に送られ、現像してチェックする。

普通の青ではなくて、ちょっとエメラルドグリーンの海の色にしたいね。などと私が我儘を言う。試写をみたスタッフが、その足で撮りなおしのために伊豆のもどる。

３週間目。これならば、と思う成果が出た。

ところが、岩間君はもう一度チャレンジしたいという。ギリシャ文明の遺産はそのまま海底にある。

やっとコツがわかってきたから、今度こそもっとすごい画面が撮れるという。

その岩間カメラマンが帰ってきた。

日焼けした顔に歯だけがやけに白い。ニヤニヤしながら彼が言う。

「ダメでした。この前の撮影分を使ってください。」

「天気は良かったんじゃないの」

「ええ、快晴で波静かなんですが」

一緒に帰ってきたスタッフたちがゲラゲラ笑いだした。

「どうしたの？」と私。

「あのですねえ、ヴィーナスの胸に毛がはえちゃったんです。ヘラクレスの顔もヒゲもじゃで、おまけにわき毛がでてしまいまして・・」

「・・・・・？」

「予算の関係で、ギリシャの彫刻は大理石ではなくて、石膏でできていましたよね。それを３週間以上も沈めておいた。そうしたら石膏がふやけて、はがされてきたんです。ああゆう像は、中身がシュロ縄だとか木くずでできているんですね。」

「それで黒い胸毛がゆらゆらなんだね」

「ええ、ひらひらゆらゆらです。いっしょに潜った全員が一瞬、目をうたがいました。それからもう、おかしくって」

岩間君が真顔にもどっていった。

「でも、水中で大笑いするのは危険だってことがわかりました。ゲラゲラ笑うたびに水を呑んじゃうんです。全員遭難しそうになって急いで浮上しました。」

「じゃあ、ヴィーナスはそのまま水の底に残してきたわけね」

「それがちょっと気掛かりなんですが、伊豆のあのあたりは、天皇が海底をのぞきながら生物採集をされる場所なんだそうです。もしあれを見つけちゃったらどういうことになりますかね」

真っ黒に日焼けした潜水チームの連中が、口を揃えて言った。

「知～らない。しい～らない。」

その後、生物学御研究所からは何の報告もない。

ほっとした岩間君は、アストロラマ「誕生」が完成すると、「みどり館」の記録映画撮影を担当することになった。人気館で、入館を待つ人の列が絶えることのない「みどり館」の様子を。わき目もふらずに撮影していた、はずである。

万博が終わりに近づいたころ、ビッグニュースが入ってきた。

あの堅物の岩間君がついに見つけたらしい。

コンパニオンの朝日順子さん。ばんざい。

仲間達が勝手に結婚式の日取りを決める会を開いた。

「岩間君も、なかなかやるねえ」

独立して、作家を始めていた畑正憲君が決然といった。

「あの男は大丈夫だ。いつでも堅くて、男の中の男だ」

☆☆☆

「美保さんと歩こう会」の報告

桑原由紀子

前夜の雨と雷で心配していた天気も、曇りから次第に晴れて絶好のハイキング日和りとなった５月２４日。

待ち合わせの橿原神宮前駅東口にいくと、見覚えのある大窪厚男さん、福子さんご夫妻と初めましての、宮木宏之さん、竹本進さん登喜美さんご夫妻がすでに待っていて下さいました。

東京から来られた宮木さん、不安そうにベンチで待っていたところ、隣に座ってアストロラマを広げていた大窪さん達に嬉しくなって思わず声をかけたとか・・・私が着いた時にはもうすっかりアストロラマ仲間の雰囲気でした。

宮脇幸江さんは西宮から、杉原美保子さんは朝早くに船橋を出て、約束の時間には奈良に現われるという驚くべき行動力。青木千里さんと、ドイツから来てＡＴＲで研究しているハーバートを入れて、今回の歩こう会は総勢１０人。

予定していたバスに遅れたり、ガイド役として頼みの綱だった平真知子さんが急に行けなくなったりで、どうなることかと思っていた私も、皆さんの暖かい気持ちと前向き思考にふれて、－を＋に転換する喜びを実感しました。

住宅地あり、池あり、田んぼありののどかな道を、会う人ごとに道をたづねながら、甘樫丘まで歩くこと約１時間。いつもながら、目も耳も口も大忙しで着いた頃はみんなお腹ペコペコ。

飛鳥を一望する甘樫丘でまあるくなってお弁当。歩けば汗ばむ程の陽気も木陰に座っていると寒くてブルブル。それぞれの自己紹介をきいて、改めて人の縁というか出会いの不思議さを感じるとともに、１つの出会いを無駄にしないでお互いを活かしながら仲良しを深めていってるんだなと思いました。

美保さんからは、いつも一歩も二歩も先を行くテーマを与えて下さり、そんな事も美保さんに会う楽しみの一つになっています。今回話に出た尊厳死についても、生きている者にとって避けようのない死なのにどんな死に方をしたいかなんて考えたこともない自分がいたなと思いました。

甘樫丘から新緑におおわれた遊歩道を下って彩色壁画で有名な高松塚古墳へ。１３００年前に栄えた「飛鳥」を思い、まだまだ続くであろう地球の未来を思い、すてきな仲間と過ごせた一日、それぞれがリフレッシュできたのではないでしょうか？

ハーバートのお陰で、英会話練習中の宮木さんと私にとっては、願ってもない練習の場となったし、草花の名前に詳しい大窪福子さんのお陰で、いつもは知らないで通り過ぎる花をじっくり眺めたり・・・一人一人の持ち味を活かし合って、ほんとに出会いって楽しいですね。こんなすてきな歩こう会ってやめられない。早くも次を期待している私です。

ゆっこの「歩こう会」報告でした。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

会計報告

	摘要	収入	支出	残高
９２．３．２０	繰越			６，２８０
〃	コピー代（７７号）		３，７５０	２，５３０
〃	切手代		２，４６２	６８
４．２０	カンパ（切手で１，２４０円分）			
４．２５	カンパ	２，０００		２，０６８
５．１	コピー代（７８号）		２，５００	▲４３２
〃	切手代		４，４９８	▲４，９３０
５．２４	カンパ	１０，０００		５，０７０
６．２	カンパ	３，０００		８，０７０

赤字になったと思ったらあちこちからたくさんのカンパ・・・感謝、感謝です。ほんとうに有難うございます。

夏の楽園村いよいよ開幕！

愛児に楽園を・・・ヤマギシズムこども楽園村は、豊かな自然や動物達とともに生活しているヤマギシの村を舞台に行われます。生活の大部分を自主運営しながら、畑や動物達に関わり、大勢の仲間達と一緒に過ごします。こんな一週間を子供にプレゼントしませんか？　７／２１～２８，８／１～８，８／１１～１８，の３回あります。

問い合わせ、申し込みは☎０５９５４５－５５６２ヤマギシズム楽園村春日山事務局へ

アストロラマ No. 80

発行者　桑原由紀子　生駒市上町９－１２　　☎０７４３７－８－１９６９

１９９２．９．１

残暑お見舞い申しあげます。

子供たちの夏休みも終わり、いよいよ二学期ですね。夏の疲れも出る頃、皆様にはお変わりないでしょうか？

我が家の沙代子は、夏休み中もずっと９時から５時まで、学童保育に行ったおかげで、親子ともシャキッとした夏休みを過ごすことができました。と言っても、大いに遊べ遊べで、勉強の方はイマイチなのですが・・・

台風の合間に、学童のキャンプを楽しみ、又、ヤマギシズム子ども楽園村でも思い切り楽しんできました。では、そんな楽園村の報告から・・・

今年もまた、８月１１日から１８日までの１週間、ヤマギシズム夏の子ども楽園村に親子で参加してきました。場所は、京都府船井郡にある船南実顕地。山に囲まれ、一級河川　八田川の起点と言われるところで、関西にある実顕地のなかでも村人が２０人位のちいさな村です。ここの楽園村に来た子供達は、小学生５４人。

テーマは『夏、共通のふるさと村で生活体験と暮らし』

今回私は、生活スタッフとして、この子達の衣生活と食生活のお母さんをやらせてもらいました。昨年は、三重県の一番大きな村で、１０００人分の洗濯ものをみるだけで終わった一週間でしたが、今年は小規模な楽園村の良さをじっくり味わい、食事も子供たちと同じテーブルでいただき、いつもまわりに子供達の笑い声、歌い声を聞き、遊ぶ姿をながめながら、こんな暮らしいいなぁと思えました。暮らしの中で、いろんな「場」が用意され、子供もスタッフもそこをやっていくだけで楽園村が成り立ち、親も子も育っていく。

だれもが不思議がる楽園村の真価がその辺にあるように思う。子供たちのお兄ちゃん役をやる中等部の学生スタッフ。彼らのまわりにはいつも子供が鈴なりのようにまとわりついている。そして５４人の子供たちをぐんぐん引っ張っていく力は、学校の先生以上だなって思えた。そんな彼らも、大人の前では実にかわいい、子供らしい素直な笑顔を見せる机に向かっての勉強というのはないけれど、毎日が新しいことの発見。できたところだけを見ていく毎日。一日一日深まっていく仲良し度。

最後の夜は、迎えにきた親たちをまじえた交流会。私達スタッフにとっては、この時の親の驚いた顔をみるのがまた、楽しいひとときです。そしてどの子にもどの親にもこんな体験できたらいいなとおもうひとときでもあります。

帰ってきたら、各地でスタッフをやってきた人達が集まってそれぞれ味わってきたところを出しあって、みんなそれぞれにすばらしい体験してきたんだなぁって共感し合えるのもいいものです。みんな誰かに話したくてうずうずしてるんですよ。私も・・・だからこうして書いてしまうのですが・・・書いても話しても伝えきれないのがもどかしいけれどーーー。

皆んなもこんなすばらしい体験してみませんか？

ユッコの楽園村報告でした。

もうひとつの楽園村・・・前にもアストロラマに登場したことのある平桃子ちゃん（中２）、彼女はこの夏「スイス楽園村」に参加して楽しい体験をいっぱいしてきました。そんな桃子の日記を紹介したいと思います。

○月△日

今日、楽園村が始まった。最初、会場に来た時、外人さんがいっぱいいたからすごいどきどきした。ホントにスイスに来たんだなとか、もうすぐここにいるたくさんの外人さんと仲良しになれるとか思ってすごいワクワクした。・・中略・・でも全然言葉が通じない事が多かったから、今日は通訳して貰った。明日からは、ジェスチャーとかカタコトのドイツ語とかで通訳なしで自分からもっと積極的に、いろんな子としゃべっていきたいと思った。

×月×日

今日、登山をした。標高１，６００ｍの山に登った。登っている時、途中のへんで、パトリックさんが、「ここから先は自衛隊の練習場だから、鉄砲の玉とかが落ちているけど、絶対拾わないように」と言った。私はそれを聞いてすごく驚いた。

私は昔から、スイスは戦争のない平和の国だとおもっていた。だからスイスにも自衛隊がいるなんて思いもしなかった。なんで戦争をしないと決めた国に自衛隊がいて、鉄砲や地雷が落ちているのか、すごい不思議だった。

でもよく考えたら日本も同じだなあと思った。そしてこういうのって本当に平和かなと思った。そして私達もそれに似てるような事はないかなあと思った。

本当の仲良しってどんなんだろうと思う。そしてこの楽園村あと５日間のうちに、それを見付けだしていきたいと思う。

△月×日

面白いカタツムリとナメクジを見付けた日本のカタツムリは だけど、スイスのは こんなだった。
ナメクジはイモみたいで黒かった。よく見ると目みたいな穴があって皆で笑った。スイスの子たちと、昨日よりもっと深くわかり合えた気がした。シモネは今まであまり笑わなかったけど、今日はすごく笑って、いろんな遊びを教えてくれた。すごく楽しかった。ジャスミンは、おとなしくて中々皆の輪の中に入って来ないけど明日は絶対仲良くなりたい。

桃子のスイス楽園村日記でした

では、次にお待ちかね、秋山さんのサイドストーリーです。夏休みにもムツゴロウさんのテレビやってましたね。ムツゴロウさん若かりし頃の楽しいお話です。

アストロラマサイドストーリー　7

秋山智弘

アストロラマだよ　ムツゴロウ

１９６０年夏。私は学研映画の制作部員だった。短い教育映画や、少し長い記録映画のシナリオを書き、演出をして、いろいろな作品を作っていた。

演出者もカメラマンもほとんどが２０才台。男性も女性も独身ものばかりだった。

混乱と試行錯誤、激しい論議と友情。毎日がお祭りさわぎのこのグループが生み出す映画は話題作が多く、内外の映画祭で受賞をくりかえした。

そんなある日、私達の部屋へ男がたずねてきた。朝の新聞で私たちの作った映画の記事を読んだのだが、その作品を見せて欲しい、できることならアルバイトをしてみたいという。

白っぽい、だぶだぶな背広に油っ気のない髪の毛。笑うと上にも下にも前歯がない。

一見して変わった男だと思わないものはいないだろう。

２５才の畑正憲君との出合いだった。

こちらも、ヘンな男だのキテレツな女の集団だから、別にびっくりはしない。しゃべりだせば、とめどなく夢を拡げてゆく畑君を、たちまち仲間に引き込んでしまった。

聞けば、某大学院で動物生理学をやっているという。ちょうどいいやとばかりに、私が担当の生物映画の制作を手伝ってもらうことになった。

一緒に仕事をしてみると、知識の豊かさと映像に対するセンスが光っている。ただのめりこむと、周囲がまったく見えなくなる欠点がある。

アルバイトのはずが、映画作りが面白くて、大学をやめてしまった。

身分的にはサラリーマンなのだが、私たちがそうだったように、およそ規則だのタイムカードだのは無視した生活を送る。

私も生物の微速度撮影だの、顕微鏡撮影映画を作っていたから、集中力と忍耐では負けなかった。

一緒にスタッフを組んで作った「尾瀬」は、開発万能のわが国で、自然環境の保護を訴える明確なメッセージを持つものだった。

やがて一人前の演出家になった畑君は、動物や自然を対象にした独特の作品群を生み出していった。

新生児と母親の血液型不適合を扱った「赤ちゃんと血液型」という映画は、ヒューマニズムにあふれた名作だった。

７年ほどたったある日、私は畑君からスタジオ近くの喫茶店へ呼び出された。

「辞めようと思うんです。スタッフワークから自分一人の創造へ道を変えたいんです」

突然の話であった。私は黙っていた。

「文章を書きたいんです。そのために動物を飼いたい。いまここに居ては、それができないんです。」

「たしかに君の書くものは素晴らしいからね。でも一定のステイタスを得るまで大変なんじゃないかな」と私。

「だからやってみたいと思いましてね」

彼はもう決心を固めているのだとわかる。

「実はね、１９７０年に大阪で万国博があるんだ。ボクはそこで今までに全くなかった手法の映像を開発して、実現したいと思っているんだよ。スクリーンの四角い枠を無くした映像、われわれの視野を越えた映像ーーー」

「秋山さんがいつか話していた環境映像ですね」

「そう、まだ名前もないんだけれど、映像装置は日本の技術にハリウッドのノウハウを結びつければなんとかできるはずなんだ。問題はソフトさ。いままでの映画の「文法」とか「言語」は役に立たない。

環境映像としての新しい「語り口」を考え出さなければならないんだ。」

「それをボクにというんですね」

「そうなんだよ。一緒にやりたいんだけどね」

畑君はしばらく天井をにらんでいた。

「でもやはり、ボクには動物の体温が必要なんです。とにかく独立します。その上で手伝えることならなんでもします。」

組織を離れて物書きになった畑君にチャンスが巡ってきた。最初の出版物「われら動物みな兄弟」が日本エッセイストクラブ賞に輝いたのだ。映画作りの現場の泣き笑いの日々を暖かい目で描いたものだった。私の方の万博プロジェクトも動きはじめた。

作家の道を歩きだした畑君に相談を持ちかけた。

「アストロラマって名前をつけたんだけどね。君にシナリオを書いてほしいんだ。」

「やりますよ。約束だもの。でもこのごろやたらに忙しくなりましてね。」

「それは知ってる。でもスポンサーの人たちが焦っていてね。」

「わかりました。何とか間に合わせましょう」

私たちが、大阪の「みどり会」へ打ち合せに出掛ける朝、畑君が徹夜して作ったシナリオをかかえて、畑夫人の純子さんが、東京駅の新幹線ホームを走ってきてくれた。

「間に合ってよかったですね。主人がよろしくと申しておりました。」

「ありがとう。ありがとう。」感謝の気持ちを伝える言葉がほかになかった。

走りだした列車の中で原稿を開いた。独特の丸っこい文字が踊っていた。

シナリオは２案あった。

Ａ案は、躍動する動物たちがドームを満たす生命の讃歌だった。犬たちが３６０度の視野を走り回ったり、子猫がヒラリヒラリと天頂を飛び越えたり・・・。動物たちへの想いが命あるものの共感として、だれの胸にも伝わる内容であった。後に彼は映画「子猫物語」をヒットさせた。

一方、Ｂ案は、人気グループ、クレージーキャッツを起用し、アストロラマの機能を最大限に引き出す構成だった。ここでは、１３チャンネルの音響システムを生かして、音と映像を同調させ、２１世紀をはるかに先取りしたスラップステック・ミュージカルが意図されていた。

どちらも新鮮で、“いま”を越えていた。

どれほど説明しても、「みどり会」の方々には、畑シナリオの目ざす新しさは理解してもらえなかった。２案ともボツになった。

この時のシナリオのギャラを、私はまだ払っていない。大きな借りが残ったままである

その後、「毎日グラフ」へ畑君の連載が決まった時、私は編集部から急に頼まれて、本人に相談せずに「ムツゴロウ」というあだ名をつけた。畑君は

「もう少しカッコいい名前にしてほしかったなあ」とぼやいていたものの、以後二つの名前を上手に使い分けて、大活躍している。

これで、私の借りはちょっぴりだけ返すことができたのかも知れない。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

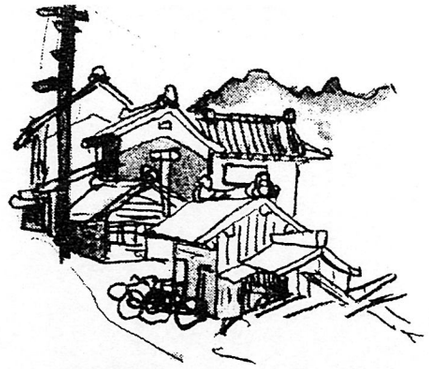
名前つけの名人？・・秋山さん、いつも楽しいお話を有難うございます。

さて、お盆といえば、里帰りとかふるさととかの言葉がうかんできます。皆さんのふるさとってどんなかな。

田舎にいる同級生にアストロラマを送っているのですが、その彼からなつかしいふるさとの記事をいっぱいのせた新聞がとどきました。

私の大好きなふるさとの話をしたいとおもいます。

ふる里の山に向かいて言うことなし
　　ふる里の山は　ありがたきかな



小学校卒業の時の色紙にこの言葉が書いてあった。そのふる里を離れて、はや２０数年が過ぎてしまいました。

いま、私にはふるさとの友は有り難きかなの心境。このアストロラマは私とふる里をつなぐパイプでもあるわけです。

私の育ったところは、四国でも指折りの山村、小学校は往復１０Ｋｍ位の獣道を歩いて６年間通学。中学になるとさらに遠くなり、学校の片隅にある寄宿舎での生活を体験。

月曜の朝、野菜や米、着替えをつめた大きな荷物を持って学校へ、そして一週間当番制で自炊をしながら寄宿舎で過ごし、土曜の午後には、洗濯物をつめて我が家へ帰る・・・ファミコンも塾も受験勉強もなく、暗くなるまでクラブ活動をし、夜は毎晩のように宿直室に押し掛けて、宿直の先生の怪談話にキャーキャーさわぐという、今思うと夢（？）のような生活でした。

そんな田舎の小さな町に、何とふるさと創成一億円事業によって、温泉を掘りあてることができたのだそうです。

両親とも大阪に来て以来、ふるさとに向いて帰ることもなくなったけれど、機会をつくって是非この温泉に浸かりたいものです。

すっかり様変わりした、ふるさとの写真を眺めながら、町や友を懐かしく想い出しているこの頃です。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

会計報告

	適要	収入	支出	残高
９２．６．２５	繰越			８，０７０
〃	コピー代（７９号）		３，６００	４，４７０
	切手代		７，４４０	▲２，９７０
７．１０	カンパ	５，０００		２，０３０
	カンパ（切手で９３０円）			
	カンパ（切手で６２０円）			

いつもカンパを有難うございます。

９月１９日から北京へ。日中国交正常化２０周年記念イベントでお箏を弾いてきます。

次号では、そんな報告もできるかな？　　お楽しみに！